

価値及びその変化の比較文化研究

(2)調査の対象者と時期及び価値の目標タイプと価値がもたらす利益による価値優位性の差異

高 木 修・矢 島 誠 人・西 川 正 之

A Cross-Cultural Study of Value and Value Change.

(2) The Differences in Value Priorities in Terms of Survey Time, Subjects, Goal Type, and Interests Served.

Osamu TAKAGI • Shigeto YAJIMA • Masayuki NISHIKAWA

Abstract

This study used a value survey based on Schwartz and Bilsky's (1987) 12 motivational domains to investigate the differences in value priorities for each domain across time (1989, 1994) and subject type (teachers, students). Also, the relationship between goal type (terminal, instrumental) and interests served (individualistic, collective, and both) was investigated.

Differences in value priorities were found across time and subject type. Also, using a general index of 51 value items, differences were found for time, subject type, goal type, and interests served.

Results from this study are compared with existing research on values.

Key words: value, value change, value priorities, goal type, interests served

抄 録

本研究の目的は、調査を通じて、Schwartz & Bilsky (1987) に基づいて選定された各価値項目及び12の動機づけ領域に見られる価値優位性が、調査の対象者（教師，学生）と時期（1989, 1994）によってどのように異なるかを明らかにするとともに、あわせて、価値の目標タイプ（終極的，道具的）や価値がもたらす利益（個人的，集团的，及び個人と集団の両方的）とによってもその優位性がどのように異なるかを明らかにすることである。

価値項目と12の動機づけ領域の多くにおいて、調査の対象者と時期による価値優位性の差異が認められた。また、目標タイプ、利益が明確な51の価値項目に基づいて算出した全般的な価値の重視度も、調査の対象者と時期、及び価値の目標タイプと価値がもたらす利益によって異なることが明らかになった。

価値に関係する既存の調査結果と対比させて、これらの結果を考察した。

キーワード：価値，価値変化，価値優位性，目標タイプ，利益

【問 題】

Rokeach (1973) は、価値 (value) が、人間行動に関するすべての科学的分野において人々が抱くさまざまな関心を統一できる概念であり、他のどの概念よりも、一層中心的位置を占めるべきだと指摘した。このように価値概念の重要性を主張する研究者は心理学者だけにとどまらず、社会学者や人類学者の中にも多数いる (Schwartz, 1992)。これらの理論家たちは、価値を、人々が行動を選択したり、それを正当化したり、さらにまた自分自身を含めて人間を評価したりするために用いる基準 (criteria) であるとしなしている (Schwartz, 1992)。

Schwartz & Bilsky (1987, 1990) は、人間の行動を理解する上で重要な意味を持つ価値について、それが、生命維持のための基本的欲求、対人的調和をはかるための相互作用的欲求、そして集団を存続させるための社会制度的欲求、という人間が抱く 3 タイプの普遍的欲求を認知的に表現するものであるとしている。また、Schwartz らは、価値が(1)概念もしくは信念であり、(2)望ましい終局の状態あるいは行動に関係し、(3)個々の特定の状況を越えて、(4)行動や事象の選択あるいは評価を方向づけ、そして(5)相対的な重要性に基づいて順序づけられる、という 5 つの主要な特徴を持つと定義した。そして、このように価値を理解することによって、その一般性 (特徴 3) と階層性 (特徴 5) の点で態度 (attitude) とは異なる概念であると考えたのである。さらに、Schwartz らは、価値の主な内容的側面が、価値自体が表す目標のタイプであるとし、価値が自己の人生における終極的目標 (terminal goals) としての意味を持つのか、あるいは、その終極の目標を達成するための道具的目標 (instrumental goals) としての意味を持つのか、という 2 つの類型で価値を捉えたのである。

Schwartz らは、上記のような価値の理解に基づき、1987年から1989年にかけて、「価値に関する比較文化研究」(Schwartz & Bilsky, 1990) を計画し、それへの参加を世界の研究者に呼びかけた。そして、彼らは、一連の調査研究を通じて、次の問題点の解明をめざした。第 1 に、個人内に形成される価値の優位性が自己の社会的経験によってどのように影響されるのか、第 2 に、個人の価値の優位性は彼らの行動の指向性や選択にどのような影響を及ぼすのか、そして第 3 に、価値の優位性が異文化間あるいは異国間でどのように異なるのか、またその差異を生み出す要因は何であるのか、を調査によって明らかにしようとしたのである。

Schwartz らの調査では、価値を表す言葉の意味が文化によって異なる可能性があるため、参加希望の研究者に働きかけて、できるだけ広い範囲の価値の収集が図られた。そして、これらを基に、彼らは、価値の比較文化研究において、価値を表す語の意味と、価値がさまざまな文化において形成する概念的カテゴリーとを分析することをめざし、価値の普遍的構造に関する理論に基づいて調査票 (Schwartz & Bilsky, 1987) を作成して研究を実施した。

Schwartz らは、研究を進めるに際して、価値が表出する動機的関心の普遍的タイプを「動機

づけ領域 (motivational domains)」と呼んだ。そして彼らは、価値を、12個の動機づけ領域の中のある特定領域と関連した利益(個人的, 集团的, あるいは個人的と集团的の両方への利益)を表すものとして捉え、その価値がある人の人生における行動指針としていかに重要であるのか、という点から評価できると考えた。彼らがあげた12の動機づけ領域とは、快樂(享樂)主義(Hedonism: 喜びあるいは感覚的満足), 達成(Achievement: 個人的成功あるいは社会的承認をもたらす達成), 社会的勢力(Social Power: 資源あるいは人々を統制すること), 自己指向性(志向性)(Self-Direction: 思考, 選択, 検討, 創造, および行為の独立), 制限的同一調性(Restrictive Conformity: 社会の期待にしたがって衝動や行為を差し控えること), 向社会性(Prosocial: 他者の幸せを維持し, 促進することへの積極的関心), 成熟性(Maturity: 経験を通して獲得される自己, 他者および世界の理解, 評価, および受容), 安全性(Security: 自己の身体と精神の安全と保全, 自己が同一視する人々や集団の安全と保全), 伝統の維持(Tradition Maintenance: 自分の集団の伝統, 社会的秩序, および習慣の尊重と顧慮), 審美性(Aesthetic: 芸術や美の評価), 刺激性(Stimulation: 人生における興奮, 新奇性, および挑戦), 精神性(Spiritual: 物質的関心からの超越)である。そして, Schwartzらは、自分たちの理論(Schwartz & Bilsky, 1987)で仮定された普遍的な動機づけ領域の中にそれぞれの価値を位置づけることによって、種々の文化圏から集められた価値がその文化に特有な意味を持つのか、あるいはいくつかの文化に共通した意味を持つのかを明らかにしようとしたのである。

わが国においては高木修(関西大学), 岩脇三良(兵庫教育大学), 岩男寿美子(慶応大学)がこの価値に関する世界的研究プロジェクトに参加した。高木らは, Schwartzらによって構成された調査票に日本の文化的特徴を反映させて、一部修正を加えた日本語版調査票を作成した(箱井・高木・岩脇・岩男, 1990)。この調査票には、被調査者の人生における行動の指針としての56の価値の項目リストと基本的属性に関する複数の項目が含まれており、特に、価値項目は, Schwartzらが示した価値の12の動機づけ領域から選ばれたものであった。

さて、第1回の価値調査が実施されて後の数年間に、日本をはじめとする世界の国々やさまざまな文化圏において、社会的, 政治的, あるいは経済的な重大変化が生じたと言われている。それらの変化は、その国もしくは文化圏の人々が抱くいくつかの価値観に大きな変容をもたらしたと想像される。もちろん、この数年間に比較的変容せず、安定して保たれている価値観もあったと考えられる。そこで、Schwartzらは、第1回調査の5年後に第2回調査の実施を計画した。そして、この5年間ににおいて変容した価値観と安定的に維持された価値観とを明らかにするとともに、社会的, 政治的, および経済的変化を敏感に認識し、価値観を変容させた人たちの特徴について検討することにした。日本においては高木修, 西川正之, 矢島誠人, 柏尾眞津子が参加することになり、1994年から95年にかけてその調査を実施した。

この価値とその変化に関する調査では、第1調査と同様に、大学生と教師が対象者となった。

それは、大学生が、真正(authenticity)のアイデンティティを確立する時期にあると言われ(関・返田, 1983), 社会化を通じて価値体系を作り上げる重要な時期にあると考えられ、他方、教師は、青年期にある人にとって代表的な社会化のエージェントであり、教師の価値観は青年の価値体系形成に影響を与えられと考えられるからである。また、この調査では、第1調査の価値項目を一部差し替えたり、追加した調査票(高木、柏尾、西川, 1997)を用いて、価値および12の動機づけ領域に見られる価値の優位性を捉えることにした。

本稿では、これらの2つの調査を基に、対象者(教師:学生)および調査時期(1989:1994)によって、特に、価値の優位性がどのように異なるかを検討することにした。あわせて、価値がもたらす利益の種類(個人的、集団的、およびそれらの両方)と、終極、道具といった価値の目標タイプとによる優位性の相違をも捉えることにした。なお、本研究の一部の結果は、西川ほか(1995)、矢島ほか(1995, 1997)、柏尾ほか(1995, 1997)、及び高木ほか(1998)によって、既に報告されている。

【方 法】

1. 調査時期と対象者の種類、人数、平均年齢:

第1回調査(1989年) 教師 229名(34.2歳) 学生 542名(21.7歳)

第2回調査(1994年) 教師 187名(35.9歳) 学生 313名(19.5歳)

なお、両調査の教師は、H大学大学院留学中の教員で、学生は、K大学の学生である。

2. 調査方法: いずれの調査でも、集団配布、回収法による質問紙調査を実施した。

3. 質問紙の構成:

1) 価値の優位性測定尺度(第1調査56項目、第2調査57項目):

第1調査で用いられた尺度は、Schwartz & Bilsky (1987) による12の動機づけ領域から選定された56項目から構成されており、それらを高木らが翻訳したもの(箱井・高木・岩脇・岩男, 1990)である。第2調査の尺度は、第1調査の教訓を生かし、意味が文化によって難解であるために21番目の価値を「世俗を超越すること」から「プライバシー」に差し替え、さらに、必要との共同研究者からの提案をうけて57番目の価値として「自由奔放な」を追加した57項目から構成されている(表1)。なお、対象者は、いずれの調査においても、それらの価値が自分の人生における行動指針としていかに重要であるかを、「最高に重要である」から「私の価値と対立する」までの9段階で評定することを求められた。

2) 個人的属性に関する質問項目(12項目):

対象者は、性別、出生年、生育時(15歳になるまで)の同居人数、家庭の経済状況、本人お

よび父親の被教育年数、婚姻状況、職業、信仰する宗教、信心深さ、支持政党、保守性、および生育地について回答することを求められた。

表1 質問項目

1. 価値の優位性項目

- 1) 平等（全員にとって機会が均等であること）
- 2) 内面的調和（心のやすらぎを得ること）
- 3) 社会的勢力（他の人々を管理したり、支配すること）
- 4) 喜び（欲望を満足すること）
- 5) 自由（行動と思想が自由であること）
- 6) 精神生活（物質ではなく、高潔さを追求すること）
- 7) 所属感（他の人々が私のことを気にかけてくれると感じること）
- 8) 社会的秩序（社会が安定すること）
- 9) エキサイティングな生活（刺激的な経験をする事）
- 10) 意義深い人生を送ること（目的を持って生活すること）
- 11) 礼儀正しさ（丁寧で、作法が良いこと）
- 12) 富（物質的財産、金銭を持っていること）
- 13) 国の安全（敵からわが国を守ること）
- 14) 自尊心（自分自身の価値を信じる事）
- *15) 恩恵の交換（一方的恩義を避けること）
- 16) 創造性（独自性、想像力があること）
- 17) 平和な世界（戦争や紛争がないこと）
- 18) 伝統の尊重（伝統ある慣習を守ること）
- 19) 円熟した愛（深い情緒的、精神的親交を持つこと）
- 20) 自己訓練（自制心があり、誘惑に抵抗すること）
- 21) <第1回調査> 世俗を超越すること（世俗の外に超然としていること）
- *21) <第2回調査> プライバシー（他人に侵されない私的な領域を持つ権利があること）
- 22) 家族の安全（愛するものたちが無事でいること）
- 23) 社会的承認（他の人々から尊敬、称賛されること）
- *24) 自然との適合（自然と調和すること）
- 25) 変化に富んだ生活（チャレンジ、新奇さ、変化に富む人生を送ること）
- 26) 英知（分別のある人理解をすること）
- 27) 権威（指導したり、命令したりする権利が認められていること）
- 28) 真の友人関係（親密で、頼りになる友人がいること）
- 29) 美の世界（自然や芸術の美を大切にすること）
- 30) 社会的正義（不正を正し、弱い者の面倒を見ること）
- 31) 自主的な（自力本願、自給自足で過ごすこと）
- *32) 穏健な（極端な感情や行動を避けること）
- 33) 誠実な（友人たちや集団に忠実であること）
- 34) 野心的な（懸命に努力し、抱負心のあること）
- 35) 心が広い（異なった考えや信念に対して寛大であること）
- *36) 謙虚な（遠慮深く、控え目であること）
- 37) 大胆な（冒険や危険を求めること）
- 38) 環境保護的な（自然を保護すること）
- 39) 影響力のある（人々や出来事に影響を与えること）
- 40) 両親や年寄りに敬意を表する（尊敬を示すこと）
- 41) 自分自身の目標を選んで生活する（自分自身の目的を選択して生活すること）
- 42) 健康的な（肉体的にも精神的にも病んでいないこと）

- 43) 有能な（能力があり，効果的，能率的であること）
- 44) 人生における自分の運命を甘受する（現在の生活環境を甘受すること）
- 45) 正直な（誠実で，偽りのないこと）
- 46) 広く知られた自分のイメージを維持する（面目を保つこと）
- 47) 従順な（義務に忠実で，責任を果たすこと）
- 48) 理知的な（論理的，理性的であること）
- 49) 援助的な（他の人々の幸福のために努力すること）
- 50) 人生を享樂する（食事，セックス，余暇などを楽しむこと）
- 51) 信心深い（宗教の信仰心があり，宗教的信条を持っていること）
- 52) 責任感のある（頼りにされ，信頼されること）
- 53) 好奇心のある（あらゆることに興味を持ち，探索的であること）
- 54) 寛容な（他の人々を快く許すこと）
- 55) 成功する（目標を達成すること）
- 56) 清潔な（きちんとして，小ざれいであること）
- *57) 自由奔放な（やりたいことを存分にすること）

2. 個人属性に関する質問

- 1) 性別
- 2) 出生年
- 3) 同居人数
- 4) 成長家庭の経済状況
- 5) 教育年数（対象者自身の教育年，父親の教育年，母親の教育年）
- 6) 結婚状況（婚姻状況）
- 7) 現在の職業
- 8) 信仰している宗教
- 9) 信心深さの程度
- 10) 考えに近い政党（支持政党）
- 11) 政治傾向に関する質問（保守 VS 革新）
- 12) 成長した街の規模

3. この調査への意見（自由記述形式）

注）＊が付してある項目は，利益の種類と目標のタイプが不明確なものである。

【結果と考察】

1. 調査の対象者と時期による価値の優位性の違い（動機づけ領域別）

まず，1989年と1994年の調査で共通して用いられた55項目（差し替えの21項目と追加の57項目を除く）それぞれについての評定に対する得点として，「最高に重要である」に9点から「非常に重要である」に8点，中央の「重要である」に5点，そして「全く重要でない」に2点から「私の価値と対立する」に1点までを配点した。つぎに，12個の動機づけ領域の得点を，各動機づけ領域を構成する価値項目の評定得点を合計することによって算出した。そして，調査の対象者と時期による価値の優位性の違いを明らかにするために，各得点を従属変数とし，対

象者の違い（要因A：教師，学生）と時期の違い（要因B：89年，94年）を独立変数とする2×2の2要因配置による分散分析を行った。なお，2つの要因は被験者間変数である。

では，以下にそれぞれの分析結果について見ていくことにする。なお，結果の検討は，動機づけ領域ごとに行う。まず最初に，各動機づけ領域を構成する価値項目の各々の分析結果を示し，つぎにこれらの項目得点に基づいて算出された各動機づけ領域得点についての分析結果を示す。そしてそれらの結果について考察を加える。なお，各動機づけ領域得点の平均値を図3から図14までに示した。

1) 快樂主義（表2）

「喜び」（欲望を満足させること）では，要因Aの主効果（ $F(1/1267)=28.08$, $p<.01$ ）と要因Bの主効果（ $F(1/1267)=7.37$, $p<.01$ ），及び要因AとBの交互作用（ $F(1/1267)=5.97$, $p<.05$ ）が有意であった。すなわち，学生の方が教師よりも，欲望の満足を一層重要であると捉えている。また，89年に比べて94年におけるこの価値の重要度は全般に低い，これは，教師における低下が原因しており，学生では差がない。

「人生を享楽する」（食事，セックス，余暇を楽しむこと）では，要因Aの主効果（ $F(1/1267)=95.54$, $p<.01$ ）のみが有意であった。すなわち，学生の方が教師よりも，人生の享楽を一層重要であると捉えている。

これらの価値項目から構成される『快樂主義』では，要因Aの主効果（ $F(1/1267)=143.45$, $p<.01$ ）及び要因AとBの交互作用（ $F(1/1267)=7.72$, $p<.05$ ）が有意であった。すなわち，学生の方が教師よりも快樂主義といった価値を一層重要であると捉えている。また，教師では89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い，学生では差がない。

以上の結果から，大学生は一般に，教師よりも『快樂主義』を一層重要な価値とみなしていることが分かった。大学生はここ10年来相変わらず受験競争の中にあって，さまざまな欲求を抑制していると考えられる。大学に入学することによって受験勉強から解放された大学生は，それまでの反動で，より一層生活を楽しむことに意欲を持つと思われる。さらに大学生は心理・社会的モラトリアムの時期にあり，社会的責任の支払いを猶予されている一方で，比較的容易に一時的収入を得ることができる。そして彼らは自ら得た収入によって，かなり自由に自己の欲求を充たすことができる。この変動の少ない大学生を取り巻く現代社会の特徴が，彼らの快

表2 対象者と調査時期の違いが『快樂主義』とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A主効果		B主効果		AとBの交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
快樂主義	5.67	6.40	6.22	6.07	5.81	5.50	6.39	6.41
4. 喜び	6.11	6.57	6.52	6.26	6.33	5.83	6.60	6.50
50. 人生を享楽する	5.24	6.23	5.92	5.88	5.30	5.17	6.18	6.31

楽志向を高い水準で維持させていると考えられる。他方、教師は、社会の現実性を実感できる立場にあり、特に、バブル経済の崩壊に影響を受けて、『快樂主義』に対する重要度を低下させたのかもしれない。

2) 達成 (表3)

「富」(物質的財産、金銭を持つこと)では、要因Aの主効果($F(1/1267)=30.25, p<.01$)のみが有意であった。すなわち、学生の方が教師よりも、物質的財産、金銭をどちらかと言えば重要であると捉えている。Inglehart (1991)は、脱物質主義者が新しい価値観の体現者であり、特に若者に多いと考えている。しかし、飽戸・田中(1986)は、わが国の若者にそのような特徴を見いだしていない。本研究の結果は、若者の物質志向を明らかにしており、飽戸・田中と同様に、若者の脱物質主義を否定するものである。近年、社会には多種多様な情報が反乱している。とりわけ青年を対象とした情報誌には誘引価の高い商品が溢れており、それらが青年の購買意欲を駆り立て、彼らの物質志向を促進しているのではないだろうか。

「社会的承認」(他の人々から尊敬、称賛されること)では、要因AとBの交互作用($F(1/1267)=5.09, p<.05$)のみが有意であった。すなわち、教師では、89年に比べて94年の方が、他の人々からの尊敬、称賛の重要度が低い、学生では差がない。また、89年では、教師の方が学生よりもこの価値をどちらかと言えば重要であると捉えているが、94年では差がない。すなわち、89年の教師が、他の3つの対象者よりも、この価値の重要度が比較的高い。

「野心的な」(懸命に努力し、抱負心のあること)では、要因Aの主効果($F(1/1267)=16.69, p<.01$)のみが有意であった。すなわち、学生の方が教師よりも、懸命に努力する、抱負心のあることをどちらかと言えば重要であると捉えている。これは、まだ一定の社会的地位を獲得していない学生にはさまざまな可能性があり、自分の将来について考え、目標を定め、そしてそれに向かって懸命に努力することが重要だと考えているからであろう。

「有能な」(能力がある、効果的、能率的であること)では、主効果および交互作用とも有意でなかった。すなわち、調査者および時期で、能力のある、効果的、能率的であることの重要

表3 対象者と調査時期の違いが『達成』とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A主効果		B主効果		AとBの交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
達成	5.57	5.84	5.81	5.66	5.69	5.41	5.86	5.81
12. 富	5.07	5.61	5.49	5.34	5.20	4.91	5.62	5.60
23. 社会的承認	5.39	5.24	5.34	5.21	5.57	5.16	5.24	5.24
34. 野心的な	5.41	5.83	5.75	5.61	5.46	5.35	5.87	5.76
43. 有能な	5.88	5.95	6.01	5.80	5.98	5.76	6.03	5.83
55. 成功する	6.08	6.57	6.46	6.33	6.24	5.88	6.55	6.60

度に差がなかった。

「成功する」（目標を達成すること）では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=29.41, p<.01$ ）および要因AとBの交互作用（ $F(1/1267)=5.56, p<.05$ ）が有意であった。すなわち、学生の方が教師よりも、目標を達成することをどちらかと言えば重要であると捉えている。また、学生では、89年と94年の両方で一貫して比較的高い値が示されているが、教師は89年に比べて94年の方がこの価値の重要度が低い。この5年間におけるわが国の経済の減退や汚職などに代表される社会問題の深刻化が社会人である教師により強く影響し、彼らの成功への価値を低下させたのだろう。

これらの価値項目から構成される『達成』では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=19.46, p<.01$ ）および要因Bの主効果（ $F(1/1267)=5.24, p<.05$ ）が有意であった。交互作用は有意でなかった。すなわち、学生の方が教師よりも、富や社会的承認を得ること、野心的であること、有能で成功することといった達成の価値をどちらかと言えば重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方が、この価値の重要度が低い。総務庁青少年対策本部の世界青年意識調査（1993）では、青年たちに悩みや心配事としてどのようなものがあるかを複数回答で尋ねている。わが国の場合、第1位が「お金のこと」であり、第2位が「仕事のこと」、以下「就職のこと」、「異性との交際のこと」、「健康のこと」と続く。この結果から、富であるお金、そして社会的承認を得るための就職などを青年たちがいかに重視しているかが分かる。大学生はモラトリウム期にあり、この時期において彼らは自分の生き方、価値観、あるいは将来の職業を決定し、経済的・社会的に不安定な状態からの脱却と自己の確立をめざそうとする。このために大学生の達成欲求が教師と比べてより高かったと考えられる。

3）社会的勢力（表4）

この領域のいずれの価値も、全般に、あまり重要とは受け取られていないようである。

「社会的勢力」（他の人々を管理したり支配すること）では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=17.97, p<.01$ ）および要因AとBの交互作用（ $F(1/1267)=15.84, p<.01$ ）が有意であった。すなわち、学生よりも教師の方が、他の人々を管理したり支配することを一層重要でないと考

表4 対象者と調査時期の違いが「社会的勢力」とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A主効果		B主効果		AとBの交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
社会的勢力	3.63	3.92	3.88	3.73	3.86	3.34	3.96	3.89
3. 社会的勢力	2.93	3.36	3.30	3.09	3.24	2.53	3.42	3.33
27. 権威	3.21	3.50	3.55	3.18	3.52	2.83	3.39	3.56
39. 影響力のある	4.55	4.85	4.79	4.69	4.84	4.19	4.98	4.77
46. 自分のイメージ維持	3.83	3.96	3.88	3.97	3.86	3.80	4.08	3.90

えている。また、教師では、89年の方が94年よりもこの価値の重要度が低いが、学生では差が見られない。一方、89年では、教師と学生の間にこの価値の重要度に差がないが、94年では、教師の方がこの価値を一層重要でないと捉えている。つまり、94年の教師が、他の3つの対象者よりも、この価値の重要度を一番低く評価している。

「権威」（指導したり命令したりする権利を持つこと）では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=7.19, p<.01$ ）および要因Bの主効果（ $F(1/1267)=14.33, p<.01$ ），そして要因AとBの交互作用（ $F(1/1267)=6.60, p<.05$ ）が有意であった。すなわち、学生よりも教師の方が、指導したり命令したりする権利を一層重要でないと捉えている。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度が低い。さらに、教師では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低いが、学生では差がない。一方、89年では、学生と教師の間にこの価値の重要度に差はないが、94年では教師の方がこの価値を一層重要でないと捉えている。

「影響力のある」（人々や出来事に影響を与えること）では、他の3項目に比べて比較的重要度は高いが、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=8.13, p<.01$ ）および要因AとBの交互作用（ $F(1/1267)=17.36, p<.01$ ）が有意であった。すなわち、学生の方が教師よりも、人々や出来事に影響を与えることを一層重要であると捉えている。また、教師では、89年と比べて94年の方がこの価値の重要度は低いが、学生では差がない。一方、89年では、教師と学生の間にこの価値の重要度に差はないが、94年では、学生の方がこの価値を一層重要であると捉えている。つまり、94年の教師が、他の3対象者に比べ、この価値の重要性を一番低く評価している。

「広く知られた自分のイメージを維持する」（面目を保つこと）では、主効果および交互作用とも有意でなかった。すなわち、対象者および時期で面目を保つことの重要度に差がなかった。

これらの価値項目から構成される『社会的勢力』では、要因Aの主効果（ $F(1/1266)=21.06, p<.01$ ）および要因AとBの交互作用（ $F(1/1266)=24.00, p<.01$ ）が有意であった。すなわち、学生よりも教師の方が、社会的勢力や権威を持ち、影響力を行使し、広く知られた自分のイメージを維持する、といった価値を一層重要でないと捉えている。また、教師では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低いが、学生では差が見られない。一方、89年では、教師と学生の間にこの価値に対する重要度に差はないが、94年では、教師の方が、この価値の重要度をより低く評価している。教師たちは、大学生以上に、権威や社会的な影響力の行使による事態の好転を期待しなくなっているようである。

4) 自己志向性 (表5)

「自由」（行動と思想が自由であること）では、要因Bの主効果（ $F(1/1267)=25.44, p<.01$ ）のみが有意であった。すなわち、89年に比べて94年の方が行動と思想の自由の重要度は低い。

「創造性」（独自性や想像力を発揮すること）では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=9.77, p<.01$ ）および要因Bの主効果（ $F(1/1267)=14.76, p<.01$ ）が有意であった。交互作用は

表5 対象者と調査時期の違いが「自己志向性」とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A主効果		B主効果		AとBの交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
自己志向性	6.26	6.16	6.27	6.07	6.36	6.13	6.23	6.03
5. 自由	6.87	7.02	7.13	6.73	7.00	6.72	7.19	6.74
16. 創造性	6.23	5.98	6.18	5.87	6.48	5.94	6.06	5.83
31. 自主的な	6.06	5.87	6.02	5.80	6.12	5.97	5.97	5.69
41. 目標を選んで生活	7.02	6.76	6.91	6.75	7.03	7.01	6.85	6.60
48. 理知的な	5.50	5.11	5.26	5.21	5.52	5.46	5.14	5.06
53. 好奇心の強い	5.86	6.19	6.12	6.03	6.01	5.67	6.16	6.25

有意でなかった。すなわち、教師の方が学生よりも、独自性や想像力を一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要性は低い。

「自主的な」（自力本願や自給自足で過ごすこと）では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=5.15$, $p<.05$ ）および要因Bの主効果（ $F(1/1267)=7.22$, $p<.01$ ）が有意であった。交互作用は有意でなかった。すなわち、教師の方が学生よりも自力本願や自給自足を一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い。

「自分自身の目標を選んで生活する」（自分自身の目的を選択して生活すること）では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=8.61$, $p<.01$ ）のみが有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、自分自身の目的を選択して生活することを一層重要であると捉えている。

「理知的な」（論理的、理性的であること）では、他の6項目よりも重要度の評価が低いが、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=19.84$, $p<.01$ ）のみが有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、論理的、理性的であることをどちらかと言えば重要であると捉えている。

「好奇心の強い」（あらゆることに興味を持ち、探索的であること）では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=13.95$, $p<.01$ ）および要因AとBの交互作用（ $F(1/1267)=5.74$, $p<.05$ ）が有意であった。すなわち、学生の方が教師に比べて、あらゆることに興味を持ち、探索的であることを一層重要であると捉えている。また、教師では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低いが、学生では差がない。一方、89年では、教師と学生の間にこの価値の重要度に差はないが、94年では、学生の方がこの価値を一層重要であると捉えている。

これらの価値項目から構成される『自己志向性』では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=3.88$, $P<.05$ ）および要因B（ $F(1/1267)=13.56$, $p<.01$ ）の主効果が有意であった。交互作用は有意でなかった。すなわち、教師の方が学生よりも、自由で、創造性に富み、自主的に、自分自身の目標を選んで生活し、理知的であり、好奇心が強いといった価値を一層重要であると捉えている。教師は、学生の経済的・精神的自立を促す立場にある。彼らは、学生以上に、人間が自分で人生の目的を選択し、自主的かつ独創的に生きることの意義を認識しているのである。

う。また、89年に比べて94年の方がこれらの価値の重要度は低い、これは、我々が創造的で自由な生活を自力で切り開くことの意義を見だしづらい方向に現代社会が進みつつあることを暗示しているのであろうか。

5) 制限的同調性 (表6)

「礼儀正しさ」(丁寧で、作法が良いこと)では、要因Bの主効果 ($F(1/1265)=12.34, p<.01$) および要因AとBの交互作用 ($F(1/1265)=5.98, p<.05$) が有意であった。すなわち、89年に比べて94年の方が、丁寧さ、作法の良さの重要度が低い。また、教師では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い、学生では差がない。一方、89年では、教師と学生の間でこの価値の重要度に差はないが、94年では、学生の方が教師よりもこの価値をどちらかと言えば重要であると捉えている。

「自己訓練」(自制心があり、誘惑に抵抗すること)では、要因Bの主効果 ($F(1/1267)=7.73, p<.01$) および要因AとBの交互作用 ($F(1/1267)=17.72, p<.01$) が有意であった。すなわち、89年に比べて94年の方が、自制心、誘惑に対する抵抗の重要度が低い。また、教師では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い、学生では差がない。一方、89年では、教師の方が学生よりもこの価値をどちらかと言えば重要であると捉えているのに対し、94年では、逆に学生の方が教師よりもこの価値をどちらかと言えば重要であると捉えている。

「従順な」(義務に忠実で、責任を果たすこと)では、他の3項目に比べて重要度の評価が低い、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=52.98, p<.01$) のみが有意であった。すなわち、学生よりも教師の方が、義務に忠実で、責任を果たすことを一層重要でないと捉えている。また、教師では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度が低い、学生は逆に、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は高い。

「清潔な」(きちんとして、小ざれいなこと)では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=26.24, p<.01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1267)=17.77, p<.01$) が有意であった。交互作用は有意でなかった。すなわち、学生は教師よりも、きちんとして、小ざれいなことを一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い。

表6 対象者と調査時期の違いが「制限的同調性」とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A主効果		B主効果		AとBの交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
制限的同調性	5.27	5.56	5.55	5.33	5.48	5.02	5.58	5.51
11. 礼儀正しさ	5.41	5.50	5.58	5.30	5.66	5.10	5.55	5.41
20. 自己訓練	5.58	5.50	5.61	5.39	5.90	5.20	5.49	5.51
47. 従順な	4.74	5.40	5.18	5.18	4.80	4.66	5.34	5.49
56. 清潔な	5.37	5.83	5.82	5.45	5.56	5.13	6.55	5.64

これらの価値項目から構成される『制限的同調性』では、要因Aの主効果 ($F(1/1265)=19.30, p<.01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1265)=12.08, p<.01$)、そして要因AとBの交互作用 ($F(1/1265)=10.21, p<.01$) が有意であった。すなわち、学生の方が教師よりも、礼儀正しく、自己訓練が行き届き、従順で、清潔であるといった価値を一層重要であると捉えている。また、全般に、89年に比べて94年の方がこれらの価値の重要度は低い、特に教師におけるこの価値の重要度の低下が顕著である。つまり、89年には、教師と学生の間にこの価値の重要度に差はないが、94年には、教師がこの価値の重要性を一層低く捉えている。教師は、現代社会において礼儀正しく、自制心を持って、あるいは義務と責任を遂行することによる社会秩序の維持が困難であると感じているために、それらの価値に期待を持てなくなったのだろうか。

6) 向社会性 (表7)

「平等」(全員にとって機会が均等であること)では、要因A(評定者の違い)の主効果 ($F(1/1267)=5.74, p<.05$) および要因B(時期の違い)の主効果 ($F(1/1267)=15.05, p<.01$)、そして要因AとBの交互作用 ($F(1/1267)=5.30, p<.05$) が有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、全員にとって機会が均等であることを一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方が、この価値の重要度は低い。さらに、教師では、この価値に対する重要度に差はないが、学生では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い。

「平和な世界」(戦争や紛争がないこと)では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=22.48, p<.01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1267)=35.09, p<.01$) が有意であった。交互作用は有意でなかった。すなわち、教師の方が学生よりも、戦争や紛争がないことを一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い。

「社会的正義」(不正を正し、弱いものの面倒を見ること)では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=48.57, p<.01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1267)=10.93, p<.01$)、そして要因AとBの

表7 対象者と調査時期の違いが『向社会性』とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A主効果		B主効果		AとBの交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
向社会性	6.20	5.88	6.07	5.85	6.24	6.15	5.99	5.67
1. 平等	5.86	5.66	5.86	5.52	5.89	5.82	5.85	5.34
17. 平和な世界	7.04	6.62	6.96	6.44	7.23	6.81	6.85	6.22
30. 社会的正義	6.13	5.54	5.83	5.59	6.15	6.12	5.69	5.28
33. 誠実な	6.31	6.02	6.13	6.10	6.23	6.42	6.08	5.91
45. 正直な	6.36	6.34	6.46	6.17	6.38	6.35	6.50	6.06
49. 援助的な	5.57	5.10	5.27	5.23	5.58	5.56	5.13	5.04
54. 寛容な	6.12	5.86	5.96	5.91	6.22	6.00	5.85	5.86

交互作用 ($F(1/1267)=4.50, p<.05$) が有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、不正を正し、弱いものの面倒を見ることを一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方が、この価値の重要度は低い。さらに、教師では、この価値の重要度に差はないが、学生では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い。

「誠実な」では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=10.64, p<.01$) が有意であった。その他の主効果および交互作用は有意でなかった。すなわち、教師は学生よりも、友人たちや集団に忠実であることを一層重要であると捉えている。

「正直な」(誠実で、偽りのないこと)では、要因Bの主効果 ($F(1/1267)=11.93, p<.01$) および要因AとBの交互作用 ($F(1/1267)=11.93, p<.05$) が有意であった。すなわち、89年に比べて94年の方が、誠実で、偽りのないことの重要度が低い。また、教師では、この価値の重要度に差はないが、学生では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い。

「援助的な」(他の人々の幸福のために努力すること)では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=28.38, p<.01$) のみが有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、他の人々の幸福のために努力することを一層重要であると捉えている。

「寛容な」(他の人々を快く許すこと)では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=10.56, p<.01$) のみが有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、他の人々を快く許すことを一層重要であると捉えている。

これらの価値項目から構成される『向社会的性』では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=32.73, p<.01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1267)=17.45, p<.01$)、そして要因AとBの交互作用 ($F(1/1267)=3.79, p<.05$) が有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、平等で、平和な世界であり、社会的正義を守り、誠実で、正直で、援助的で、寛容であるというこの価値を一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方が、これらの価値の重要度は低い。さらに、教師では、この価値の重要度に差はないが、学生では、89年に比べて94年の方がこれらの価値の重要度は低い。秋葉ほか(1994)は、オールポート・バーノン価値テストによって、大学生の価値観を1972年と1992年の間で比較している。彼らの結果では、20年間で愛他主義と博愛主義から構成される「社会」得点が有意に低くなっていた。本研究の結果は、最近の5年間で、大学生の向社会的価値が低まっていることを示した。これは、高木・柏尾・西川(1998)と同様に、大学生のミーイズム(見田, 1972)がますます進みつつあることを示唆しているのだろう。

しかし他方では、若者が困難な事態にある人たちに対して決して冷淡ではないことを示す事例もある。例えば1995年の阪神・淡路大震災の直後から、多くの若者がボランティアとして被災地での援助活動に従事した(高木・玉木, 1996)。また、社団法人全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センターの報告(1993)によると、近年、ボランティアの人数およびグループ数は一貫して増加していると言う。したがって、我々は、大学生の一般的な向社会的行動

を向社会的価値観以外の側面からも幅広く検討する必要があるだろう。

また教師は学生以上に『向社会的性』を重要視している。教師は学生に対して学問を教えるだけの存在ではなく、彼らのより広範囲な社会への適応を導く社会化のエージェントである。つまり教師は、社会生活を送っていく中で、何が大切なのかを学生に指導する立場である。それゆえに教師はこの価値を重視したものと思われる。

7) 成熟性（表8）

「自尊心」（自分自身の価値を信じること）では、主効果および交互作用とも有意でなかった。すなわち、対象者および時期で、自分自身の価値を信じることの重要度に差がなかった。

「円熟した愛」（深い情緒的、精神的親交を持つこと）では、主効果および交互作用とも有意でなかった。すなわち、対象者および時期で、深い情緒的、精神的親交の重要度に差がなかった。

「英知」（分別のある人生理解をすること）では、要因Bの主効果 ($F(1/1267)=7.89, p<.01$) のみが有意であった。すなわち、89年に比べて94年の方が、分別のある人生理解の重要度が低い。

「心が広い」（異なった考え方や信念に対して寛大であること）では、主効果および交互作用とも有意でなかった。すなわち、評定者および時期で、異なった考え方や信念に対して寛大であることの重要度に差がなかった。

「人生における自分の運命を甘受する」（現在の生活環境を甘受すること）では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=10.43, p<.01$) および要因AとBの交互作用 ($F(1/1267)=7.70, p<.01$) が有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、現在の生活環境を感受することを一層重要であると捉えている。また、教師では、時期による差がないが、学生では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度が高い。一方、89年では、教師の方が学生よりもこの価値を一層重要であると捉えているが、94年では、両者に差がない。

これらの価値項目から構成される『成熟性』では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=2.73,$

表8 対象者と調査時期の違いが『成熟性』とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A主効果		B主効果		AとBの交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
成熟性	5.74	5.65	5.70	5.64	5.84	5.62	5.64	5.66
14. 自尊心	6.09	5.92	5.99	5.96	6.14	6.02	5.92	5.92
19. 円熟した愛	6.44	6.63	6.62	6.48	6.50	6.37	6.68	6.55
26. 英知	5.62	5.55	5.66	5.43	5.82	5.37	5.60	5.46
35. 心が広い	6.47	6.39	6.43	6.41	6.52	6.42	6.37	6.44
44. 自分の運命を甘受	4.09	3.75	3.82	3.92	4.23	3.91	3.65	3.92

$p < .05$) および要因AとBの交互作用 ($F(1/1267) = 3.92, p < .05$) が有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、自己の価値を信じ、深い情緒的、精神的親交を持ち、分別のある人生理解を進め、異なった考え方や信念に対して寛大で、現在の生活環境を甘受するといった価値を一層重要であると捉えている。また、教師では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度が低い、学生では差がない。一方、89年では、教師の方が学生よりもこの価値を一層重要であると捉えているが、94年では、両者に差がない。この結果は、わが国の過去5年間の経済的、社会的、あるいは政治的变化によって、教師たちが成熟したおとなの役割の重要さを低く評価するようになったことを示唆している。

8) 安全性 (表9)

「内面的調和」(心がやすらいでいること)では、有意な主効果および交互作用はなかった。すなわち、対象者および時期により、心のやすらぎの重要度に差がなかった。

「所属感」(他の人々が私のことを気にかけてくれると感じること)では、要因AとBの交互作用 ($F(1/1267) = 10.91, p < .01$) のみが有意であった。主効果はいずれも有意でなかった。すなわち、教師では、差はないが、学生では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度が高い。一方、89年では、教師の方が学生に比べてこの価値を一層重要であると捉え、94年では、逆に学生の方が教師よりもこの価値を一層重要であると捉えている。

「国の安全」(敵からわが国を守ること)では、他の6項目よりも重要度の評価が低い、要因Aの主効果 ($F(1/1266) = 24.33, p < .01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1266) = 15.49, p < .01$)、そして要因AとBの交互作用 ($F(1/1266) = 4.64, p < .05$) が有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、敵からわが国を守ることをどちらかと言えば重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い。さらに、学生では、差はないが、教師では、94年に比べて89年の方がこの価値の重要度が高い。一方、89年では、教師の

表9 対象者と調査時期の違いが「安全性」とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A主効果		B主効果		AとBの交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
安全性	6.54	6.45	6.51	6.43	6.62	6.44	6.47	6.43
2. 内面的調和	6.91	6.90	6.85	6.98	6.88	6.95	6.85	7.00
7. 所属感	5.44	5.44	5.40	5.52	5.57	5.28	5.32	5.66
13. 国の安全	5.18	4.69	4.99	4.63	5.50	4.79	4.78	4.53
22. 家族の安全	7.67	7.17	7.36	7.29	7.55	7.81	7.28	6.98
28. 真の友人関係	6.66	7.34	7.13	7.10	6.77	6.53	7.28	7.44
42. 健康的な	7.58	7.27	7.47	7.20	7.69	7.44	7.39	7.06
52. 責任感のある	6.35	6.36	6.39	6.31	6.40	6.28	6.39	6.34

方が学生よりもこの価値をどちらかと言えば重要であると捉えているが、94年では、その差がなく、どちらかと言えばあまり重要でないと捉えている。つまり、89年の教師が、他の3対象者に比べ、この価値の重要性の評価が一番高い。

「家族の安全」（愛する者たちが無事でいること）では、他の項目に比べて一番評定が高いが、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=41.21, p<.01$ ）および要因AとBの交互作用（ $F(1/1267)=12.72, p<.01$ ）が有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、愛する者たちが無事でいることを一層重要であると捉えている。また、教師では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度が高いが、学生では逆に89年の方が94年に比べてこの価値の重要度が高い。

「真の友人関係」（親密で、頼りになる友人がいること）では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=74.80, p<.01$ ）および要因AとBの交互作用（ $F(1/1267)=6.25, p<.05$ ）が有意であった。すなわち、学生の方が教師よりも、親密で頼りになる友人を持つことを一層重要であると捉えている。また、この重要度に関する両者の差が、89年よりも94年において一層大きくなっている。総務庁青少年対策本部「世界青年意識調査」による質問項目、「充実していると感じるとき」を第4回（1988）と第5回（1993）で比較すると、友人や仲間といるときが62.0%から70.8%へと大きく増加している。このことは、青年が切実に真の友人を求めていることを示しており、この研究の結果と一致している。

「健康的な」（肉体的にも精神的にも病んでいないこと）では、重要度評定が全般に高いが、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=15.55, p<.01$ ）および要因Bの主効果（ $F(1/1267)=13.28, p<.01$ ）が有意であった。交互作用は有意でなかった。すなわち、教師の方が学生よりも、肉体的にも精神的にも病んでいないことを一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い。

「責任感のある」（頼りにされ、信頼されること）では、主効果および交互作用とも有意でなかった。すなわち、評定者および時期で、頼りになる、信頼しうることの重要度に差がなかった。

これらの価値項目から構成される『安全性』では、要因Aの主効果（ $F(1/1266)=2.45, p<.05$ ）および要因Bの主効果（ $F(1/1266)=2.42, p<.05$ ）が有意であった。交互作用は有意でなかった。すなわち、教師の方が学生よりも、心がやすらいでいること、他の人々が私のことを気にかけてくれると感じること、敵からわが国を守ること、愛する者たちが無事でいること、親密で、頼りになる友人がいること、肉体的にも精神的にも病んでいないこと、頼りにされ、信頼されることといった安全性の価値を一層重要であると捉えている。高木ほか(1998)によれば、教師は大学生よりも、暴力、犯罪、あるいは戦争などによる脅威を一層強く感じており、決して安全ではないと捉えていた。したがって教師は、安全性の価値をより一層重要であると評価したのである。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低くなっている。高木ほか（1998）では、教師も大学生も共に、個人の安全性が5年前に比べて少し悪くなった

と認知していた。ところが本研究の結果では、安全性の価値の評価が有意に低下している。これは、人々が、安全性の低下を認識しつつも、脅威を回避する有効な手段を直接持つことが困難であるため、この価値の重要性を下げたのであろうか。あるいは、人々は安全性の低下が日常生活に決定的な脅威をもたらすとは考えないようになったのだろうか。

9) 伝統の維持 (表10)

「社会秩序」(社会が安定すること)では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=27.29, p<.01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1267)=16.81, p<.01$) が有意であった。交互作用は有意でなかった。すなわち、教師の方が学生よりも、社会の安定を一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い。

「伝統の尊重」(伝統ある慣習を守ること)では、全般に重要性の評価が低い、要因Aの主効果 ($F(1/1266)=53.67, p<.01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1266)=17.43, p<.01$)、そして要因AとBの交互作用 ($F(1/1266)=17.17, p<.01$) が有意であった。すなわち、教師よりも学生の方が、伝統ある慣習を守ることを一層重要でないと捉えている。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は低い。さらに、教師では、89年に比べて94年の方が、この価値の重要度は低い、学生では、差がない。一方、89年では、教師の方が学生に比べてこの価値をどちらかと言えば重要であると捉えているが、94年では、教師と学生との間に差はない。

「両親や年寄りに敬意を表する」(敬意を示すこと)では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=14.21, p<.01$) のみが有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも敬意を示すことを一層重要であると捉えている。

「信心深い」(宗教の信仰心があり、宗教的信条などを持っていること)では、重要性の評価が最も低い、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=103.46, p<.01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1267)=14.96, p<.01$)、そして要因AとBの交互作用 ($F(1/1267)=4.38, p<.05$) が有意であった。すなわち、教師よりも学生の方が、宗教の信仰心があり、宗教的信条などを持っていることを一層重要でないと捉えている。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は

表10 対象者と調査時期の違いが「伝統の維持」とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A主効果		B主効果		AとBの交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
伝統の維持	5.10	4.50	4.79	4.53	5.35	4.78	4.55	4.39
8. 社会的秩序	5.99	5.56	5.82	5.52	6.17	5.76	5.68	5.37
18. 伝統の尊重	4.75	4.10	4.44	4.12	5.14	4.26	4.14	4.04
40. 両親や年寄りに敬意	5.91	5.60	5.74	5.65	6.05	5.74	5.61	5.59
51. 信心深い	3.74	2.69	3.16	2.85	4.05	3.36	2.78	2.54

低い。さらに、教師と学生の差は、94年よりも89年において一層大きい。

これらの価値項目から構成される『伝統の維持』では、要因Aの主効果 ($F(1/1266)=110.70$, $p<.01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1266)=27.85$, $p<.01$)、そして要因AとBの交互作用 ($F(1/1266)=11.10$, $p<.01$) が有意であった。すなわち、教師は、伝統の継承者としての役割を担う社会化のエージェントであるため、学生よりも、社会的秩序、伝統の尊重、両親や年寄りに敬意を表すること、信心深いことといったこの価値をどちらかと言えば重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方がこれらの価値の重要度は低い。総務庁青少年対策本部「世界青年意識調査」では、その第2回（昭和52年）から第5回（平成5年）までを通じて、年老いた親を養うことについて尋ねている。経年変化を見ると、「どんなことをしてでも養う」と答えた青年は第2回では34.5%で、第5回では22.6%と減少している。これらの結果は、若者の両親や年寄りへの敬意が低下していることを示唆している。価値の多様化が進むにつれて、従来の伝統的価値観は絶対的な意味を失い、その重要度が低下していると考えられる。

10) 審美性（表11）

「美の世界」（自然や芸術の美を大切にすること）では、要因Aの主効果 ($F(1/1266)=22.86$, $p<.01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1266)=23.10$, $p<.01$) が有意であった。交互作用は有意でなかった。すなわち、教師の方が学生よりも、自然や芸術の美を一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方が、この価値の重要度は低い。

「環境保護的な」（自然を保護すること）では、要因Aの主効果 ($F(1/1267)=5.43$, $p<.05$) のみが有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、自然を保護することを一層重要であると捉えている。

これらの価値項目から構成される『審美性』では、要因Aの主効果 ($F(1/1266)=31.02$, $P<.01$) および要因Bの主効果 ($F(1/1266)=16.82$, $p<.01$)、そして要因AとBの交互作用 ($F(1/1266)=6.71$, $P<.05$) が有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、自然や芸術の美を大切にすること、自然を保護することといったこの価値を一層重要であると捉えている。この結果は、Inglehart (1991) の「物質主義—脱物質主義」モデルに基づく予測、つまり、脱物質主義者に若者が多く、彼らが審美性を一層追求するという予測とは一致していない。また、89年に比べて94年の方がこれらの価値の重要度は低い。さらに、教師では、89年に比べて

表11 対象者と調査時期の違いが『審美性』とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A 主効果		B 主効果		A と B の交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
審美性	5.51	5.20	5.38	5.17	5.71	5.26	5.24	5.11
29. 美の世界	5.46	5.04	5.33	4.93	5.74	5.10	5.16	4.82
38. 環境保護的な	5.56	5.35	5.43	5.41	5.67	5.42	5.32	5.40

94年の方がこれらの価値の重要度は低い、学生では、差がない。秋葉ほか(1994)は、現在の大学生が20年前の大学生に比べて、『審美性』への価値をより一層低く評価していることを明らかにした。しかし本研究の結果では、最近の5年間において大学生の『審美性』への価値は決して低下しているわけではない。高度経済成長期が終わりつつあった1980年代後半の時点まで、すでに大学生の抱く自然美や芸術美への価値観は低下してしまい、その後彼らは「美の追求」への関心を喪失してしまっているのだろうか。他方、教師はより良い社会へと人々を導く指導者であり、個人・集団にとって何が大切かを学生に教える役割を担う。そのために彼らは社会問題に対しても敏感であると考えられる。したがって教師は、1989年の時点においてなお、経済成長期に行われた開発とそれがもたらした自然破壊に対して強い問題意識を抱き、審美的価値を重要なものとして認識していたのだろう。しかしながら、その教師も今や、美を追求することの意義を見いだしづらくなっているのだろう。

11) 刺激性(表12)

この領域の価値の重要性評価は、全般に、比較的低いようである。

「エキサイティングな生活」(刺激的な経験をする)では、要因Aの主効果($F(1/1267)=80.09, p<.01$)および要因Bの主効果($F(1/1267)=4.29, p<.05$)が有意であった。交互作用は有意でなかった。すなわち、学生の方が教師よりも、刺激的な経験をするをどちらかと言えば重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方が、この価値の重要度は一層低い。

「変化に富んだ生活」(チャレンジ、新奇さ、変化に富む人生を送ること)では、要因Aの主効果($F(1/1267)=32.85, p<.01$)および要因AとBの交互作用($F(1/1267)=5.20, p<.05$)が有意であった。すなわち、学生の方が教師よりも、チャレンジ、新奇さ、変化に富む人生を送ることがどちらかと言えば重要であると捉えている。また、この両者の差は、89年においてよりも94年において一層大きくなっている。

「大胆な」(冒険や危険を求める)では、要因Aの主効果($F(1/1267)=11.19, p<.01$)および要因Bの主効果($F(1/1267)=14.68, p<.01$)、そして要因AとBの交互作用($F(1/1267)=8.28, p<.01$)が有意であった。すなわち、学生よりも教師の方が、冒険や危険を求め

表12 対象者と調査時期の違いが『刺激性』とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A 主効果		B 主効果		A と B の交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
刺激性	4.40	5.06	4.94	4.69	4.62	4.14	5.08	5.02
9. エキサイティングな生活	4.10	5.08	4.87	4.59	4.26	3.91	5.13	4.99
25. 変化に富んだ生活	4.73	5.34	5.17	5.10	4.89	4.55	5.28	5.43
37. 大胆な	4.38	4.75	4.78	4.38	4.72	3.95	4.81	4.64

ることを一層重要でないと捉えている。また、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度が一層低い。さらに、教師では、89年に比べて94年の方がこの価値の重要度は一層低い、学生では、差がない。一方、89年では、教師と学生の間にこの価値の重要度に差はないが、94年では教師の方がこの価値を一層重要でないと捉えている。

これらの価値項目から構成される『刺激性』では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=112.36$, $p<.01$ ）および要因Bの主効果（ $F(1/1267)=12.55$, $p<.05$ ），そして要因AとBの交互作用（ $F(1/1267)=12.44$, $p<.05$ ）が有意であった。すなわち、学生の方が教師よりも、エキサイティングな生活や変化に富んだ生活を大胆に送ることといったこの価値をどちらかと言えば重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方がこれらの価値の重要度は一層低い。さらに、教師では、89年に比べて94年の方がこれらの価値の重要度は一層低い、学生では差がない。教師と学生の差は、89年においてよりも94年において一層大きい。教師は、さまざまな刺激が氾らんする現代社会をそれほど肯定的には捉えておらず、結果的に『刺激性』の価値を低く評価しているのではないだろうか。他方で大学生の快樂志向が強いことはすでに述べたとおりであるが、エキサイティングで変化に富んだ生活を比較的重要視するという結果もまた、大学生の刹那的快樂志向と関連しているだろう。

12) 精神性（表13）

「精神生活」（物質ではなく、高潔さを追求すること）では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=47.71$, $p<.01$ ）および要因Bの主効果（ $F(1/1267)=12.56$, $p<.01$ ），そして要因AとBの交互作用（ $F(1/1267)=7.64$, $p<.01$ ）が有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、物質ではなく、高潔さの追求を一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方が、この価値の重要度が低い。さらに、教師では、89年に比べて94年の方が、この価値の重要度は低い、学生では、差がない。

「意義深い人生を送ること」（目的を持って生活すること）では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=10.34$, $p<.01$ ）のみが有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、目的を持って生活することを一層重要であると捉えている。

これらの価値項目から構成される『精神性』では、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=65.38$, $p<.01$ ）および要因Bの主効果（ $F(1/1267)=11.61$, $p<.01$ ），そして要因AとBの交互作用

表13 対象者と調査時期の違いが「精神性」とそれを構成する価値の優位性に及ぼす影響

	A主効果		B主効果		AとBの交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
精神性	6.63	6.17	6.38	6.22	6.82	6.40	6.20	6.12
6. 精神生活	6.12	5.47	5.79	5.52	6.42	5.74	5.53	5.38
10. 意義深い人生を送る	7.15	6.86	6.97	6.93	7.22	7.07	6.86	6.85

($F(1/1267)=7.78, p<.05$) が有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、物質ではなく、高潔さを追求し、目的を持って生活することといった価値が一層重要であると捉えている。また、89年に比べて94年の方が、この価値の重要度は低くなっている。さらに、教師では、89年に比べて94年の方が、この価値の重要度は一層低い、学生では、差がない。Inglehart (1991) の「物質主義—脱物質主義」モデルによれば、脱物質主義志向者は若者に多いと予想されている。つまり若者は、高度経済成長期を生きてきた中高年者に比べて物質的欲求が弱く、他方、知的好奇心や美的満足に強い欲求を持つなど、精神生活の充実をより一層強く求めることが仮定されている。しかし本研究の結果では、教師の方が学生に比べて精神的価値をより一層重要だとみなしている。ただし、このような傾向は教師という職業的役割意識によってさらに強められているとも考えられよう。

13) その他の価値 (表14)

「恩恵の交換」(一方的恩恵を避けること)では、要因AとBの交互作用($F(1/1267)=22.88, p<.01$)のみが有意であった。すなわち、教師では、89年に比べて94年の方が、一方的恩恵を避けることの重要度は低いが、学生では、差がない。一方、89年では、教師の方が学生よりも、この価値をどちらかと言えば重要であると捉えているが、94年では、逆に教師の方がこの価値を一層重要でないと捉えている。

「自然との適合」(自然と調和すること)では、要因Aの主効果($F(1/1267)=10.52, p<.01$)のみが有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、自然と調和することを一層重要であると捉えている。

「穏健な」(極端な感情や行動を避けること)では、要因Aの主効果($F(1/1267)=42.45, p<.01$)のみが有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、極端な感情や行動を避けることを一層重要であると捉えている。

「謙虚な」(遠慮深く、控え目なこと)では、要因Aの主効果($F(1/1267)=57.79, p<.01$)のみが有意であった。すなわち、教師の方が学生よりも、遠慮深く、控え目であることを一層重要であると捉えている。

表14 対象者と調査時期の違いがその他の価値の優位性に及ぼす影響

	A主効果		B主効果		AとBの交互作用			
	教師	学生	89	94	89教	94教	89学	94学
15. 恩恵の交換	4.81	4.87	4.90	4.78	5.12	4.43	4.81	4.99
24. 自然との適合	5.61	5.31	5.39	5.44	5.69	5.51	5.26	5.40
32. 穏健な	5.48	4.87	5.07	5.06	5.52	5.42	4.88	4.85
36. 謙虚な	5.66	4.97	5.23	5.14	5.73	5.57	5.02	4.88

2. 調査の対象者と時期および価値の目標タイプともたらす利益による価値の優位性の違い(価値全体)

前項では、調査対象者と調査時期によって価値の優位性がどのように異なるかを見てきた。この価値の優位性は、調査対象者や調査時期と関わりながら、価値が表す目標のタイプ（道具的、終局的）ともたらす利益の種類（個人的、集团的、両方）によっても異なることが考えられる。このことを解明するために、Schwartz ら (1990) が目標と利益を明確化している価値項目 (51項目、表16-1～16-4) に焦点を当て、要因 A (対象者：教師、学生) × B (調査時期：1989年、1994年) × C (目標：道具的、終極的) × D (利益：個人的、集团的、両方) の 4 要因配置による分散分析を行うことにした。

分析のために、まず、上述の51の価値項目を、Schwartz ら (1990) に従い、道具的目標を表す項目と終局的目標を表す項目とに二分した。次に、それぞれの目標別に、12の動機づけ領域ごとに、当該領域に含まれる価値項目の評定平均値を算出した。さらに、それらの動機づけ領域別評定平均値を利益ごとに合計し、その平均値を求めて、この値を分散分析の従属変数とした。なお、要因 A と B は被験者間要因、C と D は被験者内要因である。

分散分析の結果、要因 B ($F(1/1261)=42.38, p<.01$)、要因 C ($F(1/1261)=108.88, p<.01$)、要因 D ($F(2/2522)=482.18, p<.01$) の主効果、要因 A と B ($F(1/1261)=10.40, p<.01$)、要因 A と D ($F(2/2522)=77.34, p<.01$)、要因 B と C ($F(1/1261)=14.09, p<.01$)、要因 B と D ($F(2/2522)=3.78, p<.05$)、要因 C と D ($F(2/2522)=58.28, p<.01$) の 1 次の交互作用、そして、要因 A と C と D ($F(2/2522)=8.12, p<.01$) の 2 次の交互作用が有意であった。その他の主効果および交互作用は有意でなかった。

以下では、まず、表15に基づいて、主効果の分析結果を検討する。それに引き続いて、表16～表27-2に基づいて、交互作用の分析結果を検討する。

1) 対象者による価値優位性の差異

51個の価値項目の評定平均値から全般的な価値の重要度を見ると、調査対象者である教師 (5.65) と学生 (5.63) との間には有意な差は存在せず、いずれもどちらかと言えば重要であるという程度の評価しかしていない。

昨今の厳しい社会的現実の認識が学生に比べて進んでいる教師にも当てはまることではあるが、特に若者を中心とした「ミーイズム」の信奉（見田，1972；高木・柏尾・西川，1998）が、若者の社会的価値への評価低下をもたらすと推定される。他方、総理府広報室の「国民生活に関する世論調査」（1992）によると、現在の生活に対して「満足」と答えた者は、1988年と1992年の間に、20歳代前半では64.6%から72.7%へと増加し、20歳代後半でも65.6%から70.0%へと増加している。さらに、総務庁青少年対策本部（1990）の「青少年の連帯感などに関する調査」でも、大学生の「生活満足派」は1970年の62.0%から1990年には84.8%へと増加している。

最近の総務庁青少年対策本部「世界青年意識調査」(1993)によると、青少年の社会に対する満足度がやや減少しているが、これらの結果は、若者が、自分を中心とした個人的満足に関わる価値は重視する一方で、社会の維持や充実に関わる価値を積極的には見出していないことを暗示している。

2) 調査時期による価値優位性の差異

調査時期間で全般的な価値の重要度を比較すると、89年(5.70)に比べて94年(5.53)の方が重要度は低い。この結果は、前項で12の動機づけ領域別の価値重要度に及ぼす調査時期の効果について考察したように、日本を取り巻く経済的環境の悪化、政治的状況の不安定化、あるいは社会的権威の低下などが全般的な社会的価値の重要度評価を低下させていることに起因すると考えられる。

3) 価値の目標による価値優位性の差異

価値の目標は、「道具的目標」と「終極的目標」に分類される。前者には、富、創造性、社会的秩序、自主的な、誠実な、野心的な、心が広い、大胆な、環境保護的な、影響力のある、健康的な、有能な、人生における自分の運命を甘受する、正直な、広く知られた自分のイメージを維持する、従順な、理知的な、援助的な、人生を享楽する、信心深い、責任感のある、好奇心の強い、寛容な、清潔な、といった24個の価値(項目)が含まれ、一方、後者には、平等、内面的調和、社会的勢力、喜び、自由、精神生活、所属感、エキサイティングな生活、意義深い人生を送ること、礼儀正しさ、国の安全、自尊心、平和な世界、伝統の尊重、円熟した愛、自己訓練、家族の安全、社会的承認、変化に富んだ生活、英知、権威、真の友人関係、美の世界、社会的正義、両親や年寄りに敬意を表する、自分自身の目標を選んで生活する、成功する、といった27個の価値(項目)が含まれる。

分析結果によると、「道具的目標(24項目)」を表す価値(5.51)よりも、「終極的目標(27項目)」を表す価値(5.75)の方が一層重視されている。

大学生の場合、特に、世界平和という終局的目標を重視するという報告もあるが(総務庁青少年対策本部, 1990)、一般に人々は、究極的な目標の到達に結びつく具体的な行動様式よりも、理想的な人生の最終目標そのものの方に、より一層の価値を見出しているようである。

4) 利益による価値優位性の差異

価値がもたらす利益は、快樂主義、達成、社会的勢力、自己志向性、刺激性といった動機づけからなる「個人的利益」、制限的同調性、向社会性、伝統の維持といった動機づけからなる「集団的利益」、そして、成熟性、審美性、安全性、精神性といった動機づけからなる個人と集団への「両方の利益」の3種類に分類される。

分析結果によると、人々にとって、集団と個人への「両方の利益」をもたらす価値（6.06）は他の2つの利益の価値よりも重視されているが、「集団的利益」をもたらす価値（5.50）と「個人的利益」をもたらす価値（5.40）との間には重要度の差はない。

表15 対象者，調査時期，目標，利益，それぞれの主効果

	A主効果		B主効果		C主効果		D主効果		
	教師	学生	89	94	道具	終極	個人	集団	両方
価値全般	5.65	5.63	5.70	5.53	5.51	5.75	5.40	5.50	6.06

5) 要因の働き合いによる価値優位性の違い

対象者と調査時期の交互作用（要因AとB）を見ると（表16），全般的な価値の重視度は，調査時期の主効果で指摘したように，89年から94年にかけて低下しているが，それは，学生（-.10）においてよりも教師（-.30）において一層著しい。

表16 対象者と調査時期の交互作用

	AとBの交互作用			
	89教	94教	89学	94学
価値全体	5.78	5.48	5.67	5.57

対象者と利益の種類の交互作用（要因AとD）を見ると（表17），利益の主効果で指摘したように，教師（6.17），学生（6.01）ともに，個人的欲求と集団的欲求の両方を同時に充たす利益をもたらす価値を最も重要と見なしている。次に，学生（5.49）は教師（5.22）よりも，個人的欲求を充たす利益をもたらす価値を重視しているが，逆に，教師（5.67）は学生（5.42）よりも，集団的欲求を充たす利益をもたらす価値を重視している。これらの結果は，教師よりも学生の方が自己中心的な価値志向者であることを暗示している。

表17 対象者と利益の交互作用

	AとDの交互作用				
	教個	教集	教両	学個	学集
価値全体	5.22	5.67	6.17	5.49	5.42

調査時期と目標との交互作用（要因BとC）を見ると（表18），全般的な価値の重視度は，調査時期の主効果で指摘したように，89年から94年にかけて低下しているが，終極的目標の価値の重要度が一層低下し（5.83→5.63），そのため94年における道具的目標の価値との差が小さくなった（.27→.20）。

表18 調査時期と目標の交互作用

	BとCの交互作用			
	89道	89終	94道	94終
価値全体	5.56	5.83	5.43	5.63

調査時期と利益との交互作用（要因BとD）を見ると（表19），利益の主効果で指摘したよう

に、89年 (6.10), 94年 (6.00) とともに、個人的欲求と集団的欲求の両方を同時に充たす利益をもたらす価値が最も重要と見なされていたが、89年ではそれに続いて集団的欲求を充たす利益をもたらす価値 (5.59), そして最後に個人的欲求を充たす利益をもたらす価値 (5.47) の順番になっているが、94年では集団的欲求を充たす利益をもたらす価値 (5.36) と個人的欲求を充たす利益をもたらす価値 (5.29) の間の差は無くなっている。

表19 調査時期と利益の交互作用

	BとDの交互作用					
	89個	89集	89両	94個	94集	94両
価値全体	5.47	5.59	6.10	5.29	5.36	6.00

目標と利益との交互作用 (要因CとD) を見ると (表20), 道具的目標の価値 (5.88) でも終極的目標の価値 (6.14) でも、個人的欲求と集団的欲求の両方を同時に充たす利益をもたらす価値が重視されているが、終極的目標の価値では、それに続いて集団的欲求を充たす利益をもたらす価値 (5.61), そして最後に個人的欲求を充たす利益をもたらす価値 (5.38) の順番に重視されているが、道具的目標の価値では、集団的欲求を充たす利益をもたらす価値 (5.41) と個人的欲求を充たす利益をもたらす価値 (5.42) の間に差が無くなっている。この結果は、個人的利益の充足に関わるだけでなく、その到達が同時に社会や集団の存続, 維持にも寄与するような価値が最も重要視されることを示唆している。

表20 目標と利益の交互作用

	CとDの交互作用					
	道個	道集	道両	終個	終集	終両
価値全体	5.42	5.41	5.88	5.38	5.61	6.14

最後に、要因AとCとDの2次の交互作用が有意だったので、どれか一つの要因を固定して順番にブレイクダウンの分散分析を行った。

まず要因Aを教師に固定してCとDの2要因配置による分散分析を行った結果 (表21-1, -2), 要因Cの主効果 ($F(1/411) = 41.09, p < .01$), 要因Dの主効果 ($F(2/822) = 322.67, p < .01$), 及び要因CとDの交互作用 ($F(2/822) = 40.92, p < .01$) が有意であった。他方, Aを学生に固定してCとDの2要因配置による分散分析を行った結果 (表21-2), 要因Cの主効果 ($F(1/852) = 104.23, p < .01$), 要因Dの主効果 ($F(2/1704) = 238.41, p < .01$), 要因CとDの交互作用が有意であった ($F(2/1704) = 27.27, p < .01$)。次に、要因Cを道具的目標に固定してAとDの2要因配置による分散分析を行った結果 (表22-1, -2), 要因Dの主効果 ($F(2/2536) = 233.77, p < .01$) と要因AとDの交互作用 ($F(2/2536) = 34.11, p < .01$) は有意であったが、要因Aの主効果は有意でなかった。他方, 要因Cを終局的目標に固定してAとDの2要因配置による分散分析を行った結果 (表23-1, -2), 要因Dの主効果 ($F(2/2528) = 475.39, p < .01$) と要因AとDの交互作用 ($F(2/2528) = 74.95, p < .01$) は有意であったが、要因Aの主効果

は有意でなかった。最後に、要因Dを個人的利益に固定してAとCの2要因配置による分散分析を行った結果（表24-1, -2）、要因Aの主効果（ $F(1/1268)=43.27, p<.01$ ）と要因AとCの交互作用（ $F(1/1268)=10.27, p<.01$ ）は有意であったが、要因Cの主効果は有意でなかった。要因Dを集团的利益に固定してAとCの2要因配置による分散分析を行った結果（表25-1, -2）、要因Aの主効果（ $F(1/1266)=29.54, p<.01$ ）、要因Cの主効果（ $F(1/1266)=106.19, p<.01$ ）、及び要因AとCの交互作用（ $F(1/1266)=9.42, p<.01$ ）が有意であった。要因Dを両方の利益に固定してAとCの2要因配置による分散分析を行った結果（表26-1, -2）、要因Aの主効果（ $F(1/1267)=22.06, p<.01$ ）と要因Cの主効果（ $F(1/1267)=113.74, p<.01$ ）は有意であったが、要因AとCの交互作用は有意でなかった。

これらのブレイクダウンした分析の結果に基づき交互作用の内容を検討する。

まず、対象者を固定した時の結果を見ると、目標の主効果については、教師、学生のいずれの場合も、全体の分析結果（表15）とほぼ同じ結果が得られている。利益の主効果については、全体の分析結果（表15）と異なり、教師の場合の重視度は、両方、集団、個人の順番になっているが、学生の場合は、両方、個人、集団の順番である。目標と利益の交互作用は、全体の分析結果（表20）とかなり異なっている。目標を固定した場合、道具的目標での3つの利益の重視度の順番は、教師では、両方、集団、個人であるが、学生では、両方、個人、集団となっている。終極的目標でのそれも対象者で異なり、教師では、道具的目標での順番と同じであるが、学生では、両方の利益が他の2つの利益よりも重視されている。次に、利益を固定した場合、個人的利益でのみ目標の重要度が対象者で異なり、教師は道具的目標を終極的目標よりも重視しているが、学生は両目標を同程度に重視している。

次に、目標を固定した時の結果を見ると、対象者の主効果は、道具的目標、終極的目標のいずれの場合も、全体の分析結果（表15）と同じく有意でない。利益の主効果は、道具的目標の

表21-1 教師における目標と利益の主効果

	A教C主		A教D主		両方
	道具	終極	個人	集団	
価値全体	5.51	5.77	5.22	5.67	6.17

表21-2 教師における目標と利益の交互作用

	A教師CとDの交互作用					
	道個	道集	道両	終個	終集	終両
価値全体	5.27	5.52	6.01	5.16	5.82	6.25

表22-1 学生における目標と利益の主効果

	A学C主		A学D主		両方
	道具	終極	個人	集団	
価値全体	5.51	5.74	5.49	5.42	6.01

表22-2 学生における目標と利益の交互作用

	A 学生 C と D の交互作用					
	道個	道集	道両	終個	終集	終両
価値全体	5.49	5.35	5.82	5.49	5.50	6.09

場合は全体の分析結果（表15）と同じ結果だが、終極的目標の場合は異なり、重視度は両方、集団、個人の順番になっている。対象者と利益の交互作用は、全体の分析結果（表17）とかなり異なっている。目標で異なるのは、対象者を固定した場合の学生での3つの利益の重視度の順番であり、道具的目標では、両方、個人、集団の順になっているが、終極的目標では、両方の利益が他の2つの利益よりも重視されている。

表23-1 道具的目標における対象者と利益の主効果

	C 道 A 主		C 道 D 主		
	教師	学生	個人	集団	両方
価値全体	5.51	5.51	5.42	5.41	5.88

表23-2 道具的目標における対象者と利益の交互作用

	C 道具 A と D の交互作用					
	教個	教集	教両	学個	学集	学両
価値全体	5.27	5.52	6.01	5.49	5.35	5.82

表24-1 終極的目標における対象者と利益の主効果

	C 終 A 主		C 終 D 主		
	教師	学生	個人	集団	両方
価値全体	5.77	5.74	5.38	5.61	6.14

表24-2 終極的目標における対象者と利益の交互作用

	C 終極 A と D の交互作用					
	教個	教集	教両	学個	学集	学両
価値全体	5.16	5.82	6.25	5.49	5.50	6.09

最後に、利益を固定した時の結果を見ると、対象者の主効果は、全体の分析結果（表15）と異なり有意であり、個人的利益では学生の方が、集団的利益と両方的利益では教師の方が重視度は高い。目標の主効果は、利益によって異なり、個人的利益では、道具的目標と終極的目標の間に重視度の差はないが、集団的利益と両方的利益では、終極的目標の方が道具的目標よりも重視されている。対象者と目標の交互作用は、かなり複雑である。対象者を固定した場合、利益によって、道具的目標と終極的目標の重視度の大小関係が異なる。教師の場合、個人的利益では道具的目標の方が、集団的利益では逆に終極的目標の方が重視度は高く、両方的利益では差がない。一方、学生の場合、個人的利益と両方的利益では道具的目標と終極的目標の間に重視度の差はないが、集団的利益では終極的目標の方が重視されている。次に、目標を固定し

た場合も利益によって、教師と学生の重視度の大小関係が異なる。道具的目標、終極的目標のいずれの場合でも、個人的利益では学生の方が、集団的利益では教師の方が重視度が高く、両方的利益では、教師と学生の間で重視度に差が認められない。

表25-1 個人的利益における対象者と目標の主効果

	D個A主		D個C主	
	教師	学生	道具	終極
価値全体	5.22	5.49	5.42	5.38

表25-2 個人的利益における対象者と目標の交互作用

	D個人AとCの交互作用			
	教道	教終	学道	学終
価値全体	5.27	5.16	5.49	5.49

表26-1 集団的利益における対象者と目標の主効果

	D集A主		D集C主	
	教師	学生	道具	終極
価値全体	5.67	5.42	5.41	5.61

表26-2 集団的利益における対象者と目標の交互作用

	D集団AとCの交互作用			
	教道	教終	学道	学終
価値全体	5.52	5.81	5.35	5.50

表27-1 両方的利益における対象者と目標の主効果

	D両A主		D両C主	
	教師	学生	道具	終極
価値全体	6.17	6.01	5.88	6.14

表27-2 両方的利益における対象者と目標の交互作用

	D両方AとCの交互作用			
	教道	教終	学道	学終
価値全体	6.01	6.25	5.82	6.09

3. 調査の対象者×時期別に見た51項目の価値の重要度平均

分析の対象となった51項目の価値の重要度を対象者がどのように評定したかをまとめて基礎資料とする。そのため、対象者と調査時期を組み合わせた4群別に、51個の価値項目の平均重要度を算出すると共に、それらを基にして、2つの目標、3つの利益、12の動機づけそれぞれの平均点も算出した。結果は、表28-1～28-4に示した。

表28-1 89年・教師の価値観（重要度平均）

利益 \ 目標	道具的目標 (5.62)	終極的目標 (5.93)
個人的利益 (5.38)	個人・道具 (5.41)	個人・終極 (5.34)
<ul style="list-style-type: none"> ・自己志向性 (6.36) ・快楽主義 (5.81) ・達成 (5.69) ・刺激性 (4.62) ・社会的勢力 (3.86) 	16. 創造性 (6.48) 31. 自主的な (6.12) 53. 好奇心の強い (6.01) 43. 有能な (5.98) 48. 理知的な (5.52) 34. 野心的な (5.46) 50. 人生を享受する (5.30) 12. 富 (5.20) 39. 影響力のある (4.84) 37. 大胆な (4.72) 46. 自分のイメージ維持 (3.86)	41. 目標を選んで生活 (7.03) 5. 自由 (7.00) 4. 喜び (6.33) 55. 成功する (6.24) 23. 社会的承認 (5.57) 25. 変化に富んだ生活 (4.89) 9. エキサイティングな生活 (4.26) 27. 権威 (3.52) 3. 社会的勢力 (3.24)
集团的利益 (5.80)	集団・道具 (5.62)	集団・終極 (6.00)
<ul style="list-style-type: none"> ・向社会性 (6.24) ・制限的同調性 (5.48) ・伝統の維持 (5.35) 	45. 正直な (6.38) 33. 誠実な (6.23) 54. 寛容な (6.22) 8. 社会的秩序 (6.17) 49. 援助的な (5.58) 56. 清潔な (5.56) 47. 従順な (4.80) 51. 信心深い (4.05)	17. 平和な世界 (7.23) 30. 社会的正義 (6.15) 40. 両親や年寄りに敬意 (6.05) 20. 自己訓練 (5.90) 1. 平等 (5.89) 11. 礼儀正しさ (5.66) 18. 伝統の尊重 (5.14)
両方の利益 (6.29)	両方・道具 (6.10)	両方・終極 (6.37)
<ul style="list-style-type: none"> ・精神性 (6.82) ・安全性 (6.62) ・成熟性 (5.84) ・審美性 (5.71) 	42. 健康的な (7.69) 35. 心が広い (6.52) 52. 責任感のある (6.40) 38. 環境保護的な (5.67) 44. 自分の運命を甘受 (4.23)	22. 家族の安全 (7.55) 10. 意義深い人生を送る (7.22) 2. 内面的調和 (6.88) 28. 真の友人関係 (6.77) 19. 円熟した愛 (6.50) 6. 精神生活 (6.42) 14. 自尊心 (6.14) 26. 英知 (5.82) 29. 美の世界 (5.74) 7. 所属感 (5.57) 13. 国の安全 (5.50)

表28-2 94年・教師の価値観（重要度平均）

利益 \ 目標	道具的目標 (5.37)	終極的目標 (5.57)
個人的利益 (5.03)	個人・道具 (5.11)	個人・終極 (4.94)
<ul style="list-style-type: none"> ・自己志向性 (6.14) ・快楽主義 (5.50) ・達成 (5.41) ・刺激性 (4.14) ・社会的勢力 (3.34) 	31. 自主的な (5.97) 16. 創造性 (5.94) 43. 有能な (5.76) 53. 好奇心の強い (5.67) 48. 理知的な (5.46) 34. 野心的な (5.35) 50. 人生を享受する (5.17) 12. 富 (4.91) 39. 影響力のある (4.19) 37. 大胆な (3.95) 46. 自分のイメージ維持 (3.80)	41. 目標を選んで生活 (7.01) 5. 自由 (6.72) 55. 成功する (5.88) 4. 喜び (5.83) 23. 社会的承認 (5.16) 25. 変化に富んだ生活 (4.55) 9. エキサイティングな生活 (3.91) 27. 権威 (3.52) 3. 社会的勢力 (2.53)
集団的利益 (5.49)	集団・道具 (5.40)	集団・終極 (6.00)
<ul style="list-style-type: none"> ・向社会性 (6.15) ・制限的同調性 (5.02) ・伝統の維持 (4.78) 	33. 誠実な (6.42) 45. 正直な (6.35) 54. 寛容な (6.00) 8. 社会的秩序 (5.76) 49. 援助的な (5.56) 56. 清潔な (5.13) 47. 従順な (4.66) 51. 信心深い (3.36)	17. 平和な世界 (6.81) 30. 社会的正義 (6.12) 1. 平等 (5.82) 40. 両親や年寄りに敬意 (5.74) 20. 自己訓練 (5.20) 11. 礼儀正しさ (5.10) 18. 伝統の尊重 (4.26)
両方の利益 (6.03)	両方・道具 (5.90)	両方・終極 (6.09)
<ul style="list-style-type: none"> ・安全性 (6.44) ・精神性 (6.40) ・成熟性 (5.62) ・審美性 (5.26) 	42. 健康的な (7.44) 35. 心が広い (6.42) 52. 責任感のある (6.28) 38. 環境保護的な (5.42) 44. 自分の運命を甘受 (3.91)	22. 家族の安全 (7.81) 10. 意義深い人生を送る (7.07) 2. 内面的調和 (6.95) 28. 真の友人関係 (6.53) 19. 円熟した愛 (6.37) 14. 自尊心 (6.02) 6. 精神生活 (5.74) 26. 英知 (5.37) 7. 所属感 (5.28) 29. 美の世界 (5.10) 13. 国の安全 (4.79)

表28-3 89年・学生の価値観(重要度平均)

利益 \ 目標	道具的目標(5.54)	終極的目標(5.78)
個人的利益(5.51)	個人・道具(5.50)	個人・終極(5.53)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 快楽主義(6.39) ・ 自己志向性(6.23) ・ 達成(5.86) ・ 刺激性(5.08) ・ 社会的勢力(3.89) 	50. 人生を享受する(6.18) 53. 好奇心の強い(6.16) 16. 創造性(6.06) 31. 自主的な(5.97) 34. 野心的な(5.87) 43. 有能な(5.76) 12. 富(5.62) 48. 理知的な(5.46) 37. 大胆な(4.81) 39. 影響力のある(4.19) 46. 自分のイメージ維持(3.80)	5. 自由(7.19) 41. 目標を選んで生活(6.85) 4. 喜び(6.60) 55. 成功する(6.55) 25. 変化に富んだ生活(5.28) 23. 社会的承認(5.24) 9. エキサイティングな生活(5.13) 27. 権威(3.56) 3. 社会的勢力(3.33)
集团的利益(5.50)	集団・道具(5.41)	集団・終極(5.60)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 向社会性(5.99) ・ 制限的同調性(5.58) ・ 伝統の維持(4.55) 	45. 正直な(6.50) 33. 誠実な(6.08) 56. 清潔な(5.93) 54. 寛容な(5.85) 8. 社会的秩序(5.68) 47. 従順な(5.34) 49. 援助的な(5.13) 51. 信心深い(2.78)	17. 平和な世界(6.85) 1. 平等(5.85) 30. 社会的正義(5.69) 40. 両親や年寄りに敬意(5.61) 11. 礼儀正しき(5.50) 20. 自己訓練(5.49) 18. 伝統の尊重(4.14)
両方の利益(6.02)	両方・道具(5.90)	両方・終極(6.11)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 安全性(6.47) ・ 精神性(6.20) ・ 成熟性(5.64) ・ 審美性(5.24) 	42. 健康的な(7.39) 52. 責任感のある(6.39) 35. 心が広い(6.37) 38. 環境保護的な(5.32) 44. 自分の運命を甘受(3.65)	22. 家族の安全(7.28) 28. 真の友人関係(7.28) 10. 意義深い人生を送る(6.86) 2. 内面的調和(6.85) 19. 円熟した愛(6.68) 14. 自尊心(5.92) 26. 英知(5.60) 6. 精神生活(5.53) 7. 所属感(5.32) 29. 美の世界(5.16) 13. 国の安全(4.78)

表28-4 94年・学生の価値観(重要度平均)

利益 \ 目標	道具的目標 (5.46)	終極的目標 (5.66)
個人的利益 (5.45)	個人・道具 (5.46)	個人・終極 (5.44)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 快楽主義 (6.41) ・ 自己志向性 (6.03) ・ 達成 (5.81) ・ 刺激性 (5.02) ・ 社会的勢力 (3.96) 	50. 人生を享受する (6.31) 53. 好奇心の強い (6.25) 16. 創造性 (5.83) 43. 有能な (5.83) 34. 野心的な (5.76) 31. 自主的な (5.69) 12. 富 (5.60) 48. 理知的な (5.06) 39. 影響力のある (4.98) 37. 大胆な (4.64) 46. 自分のイメージ維持 (4.08)	5. 自由 (6.74) 41. 目標を選んで生活 (6.60) 55. 成功する (6.60) 4. 喜び (6.52) 25. 変化に富んだ生活 (5.43) 23. 社会的承認 (5.24) 9. エキサイティングな生活 (4.99) 3. 社会的勢力 (3.42) 27. 権威 (3.38)
集团的利益 (5.29)	集団・道具 (5.24)	集団・終極 (5.34)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 向社会性 (5.67) ・ 制限的同調性 (5.51) ・ 伝統の維持 (4.39) 	45. 正直な (6.06) 33. 誠実な (5.91) 54. 寛容な (5.86) 56. 清潔な (5.64) 47. 従順な (5.49) 8. 社会的秩序 (5.37) 49. 援助的な (5.04) 51. 信心深い (2.54)	17. 平和な世界 (6.22) 40. 両親や年寄りに敬意 (5.59) 20. 自己訓練 (5.51) 11. 礼儀正しき (5.41) 1. 平等 (5.34) 30. 社会的正義 (5.28) 18. 伝統の尊重 (4.04)
両方の利益 (5.98)	両方・道具 (5.83)	両方・終極 (6.05)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 安全性 (6.43) ・ 精神性 (6.12) ・ 成熟性 (5.66) ・ 審美性 (5.11) 	42. 健康的な (7.06) 35. 心が広い (6.44) 52. 責任感のある (6.32) 38. 環境保護的な (5.40) 44. 自分の運命を甘受 (3.92)	28. 真の友人関係 (7.44) 2. 内面的調和 (7.00) 22. 家族の安全 (6.98) 10. 意義深い人生を送る (6.85) 19. 円熟した愛 (6.55) 14. 自尊心 (5.92) 7. 所属感 (5.66) 26. 英知 (5.46) 6. 精神生活 (5.38) 29. 美の世界 (4.82) 13. 国の安全 (4.53)

<全体考察>

本稿の目的は、各価値項目および12の動機づけそれぞれにおいて、調査対象者(教師、学生)と調査時期(1989, 1994)とによって価値優位性がいかに異なるかを捉えると共に、合わせて、終極、道具といった価値目標のタイプと、それに関する個人的、集团的、及びそれらの両方といった価値利益とによっても価値優位性が異なるかどうかを捉えることにあった。

ほとんどの価値項目と12の動機づけ領域すべてにおいて、対象者と調査時期による価値優位性の差異が発見された。これらの結果は、結果と考察の第1項(動機づけ領域別)でかなり詳しく検討した。そこで、ここでは、結果と考察の第2項である価値目標のタイプ(終極的、道具的)と、価値の利益(個人的、集团的、およびそれらの両方)の視点から価値優位性の特徴を考えてみる。

過去の研究で定義されてきた価値に関する共通した特徴は、その価値が終極的目標であるか、あるいは道具的目標であるかという区別であった(Schwartz & Bilsky, 1990)。Rokeach(1974)は、終極的価値(terminal value)とは、人間がこうありたいと願う人生の理想とする最終目標であり、「このような状態であってほしい」という存在様式の究極的な目標状態に関する価値(例えば、救済、世界平和)であるとしている。他方、道具的価値(instrumental value)を、望ましい理想的な行動様式にかかわる価値であり、究極的価値を実現するために人生において行動指針とする、すなわち目標とする価値を実現するための道具的、手段的価値(例えば、正直な、援助的)であるとしている。Schwartz & Bilsky(1987)の研究は、価値に関するこの区別を一応実証的に支持している。

本研究の結果では、教師、学生ともに、道具的目標と終極的目標のいずれにおいても、個人と集団の両方への利益に関連する動機づけ領域を最も重視していた。しかし、その次に重視される動機づけ領域が教師と大学生とで異なっていた。教師は、目標が道具的か終極的にかかわらず、第2番目に集团的利益にかかわる領域を重視しており、個人的利益にかかわる領域の重要度を最も低く捉えていた。他方、大学生は、道具的目標の場合、集团的利益よりも個人的利益にかかわる領域を重視し、終極的目標の場合には個人的利益と集团的利益にかかわる領域を同程度に捉えていた(図1～2)。岡林(1996)は、日本における大学生の‘人生観’が1950年代から90年代まで、個人主義的傾向あるいは柔軟な態度を好む方向へと、大勢として同一方向へ変化していると述べている。この指摘は、大学生が教師よりも、道具的目標と終局的目標との双方において、個人的利益にかかわる動機づけ領域の価値を重視するという本研究の結果を支持している。

なお、本研究では、Schwartz & Bilsky(1990)に基づいて、価値を道具的目標と終極的目標とに分類したが、Schwartzら自身が述べているように、本来、価値を終極的か道具的かの視

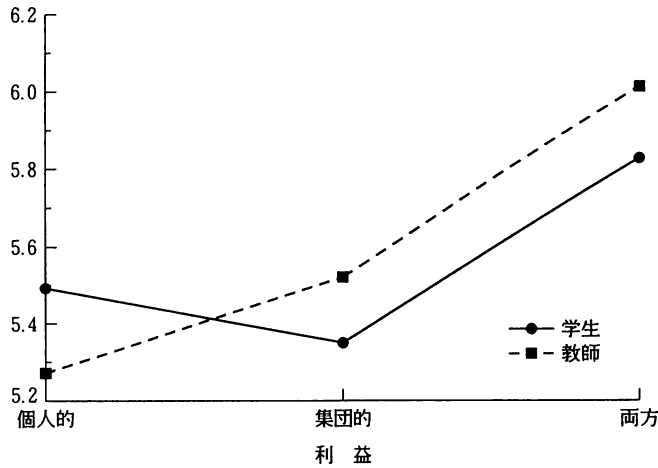


図1 道具的目標に類型化される価値の重要度

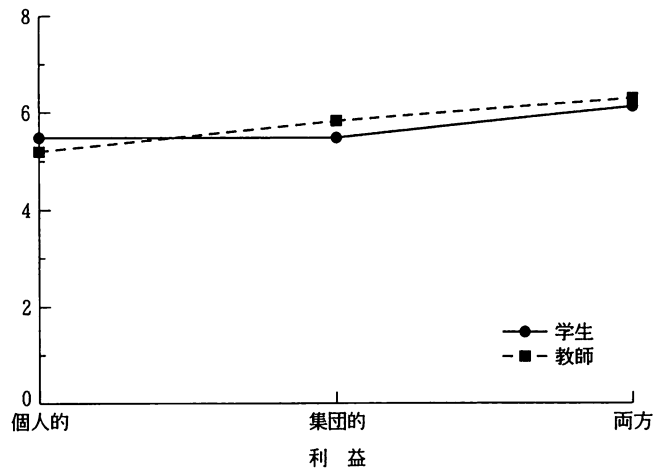


図2 終極的目標に類型化される価値の重要度

点で明確に区分することは難しい (Schwartz & Bilsky, 1990)。たとえば、「成功」は終極的目標であるが、別の終極的目標である「自尊心」を促進するための道具的意味を持つと考えることができる。イスラエルとドイツでは道具的目標と終極的目標とがうまく区別されたが、その理由として、価値項目の配置や質問の文法上の違い（例えば、終極的目標が名詞形で、道具的目標が形容詞形で呈示されたことによる）が影響したのではないかという指摘がある (Schwartz & Bilsky, 1990)。したがって、本質的に、道具的、終極的といった目標の区分が妥当であるか否かについて、さらに十分な検討を加える必要があるだろう。

次に、利益の視点から本研究の結果を検討する。Schwartz & Bilsky (1990) は、個人主義

(individualism)／集団主義 (collectivism) が社会レベルと個人レベルの両方において価値の弁別を規定する主たる次元であり、それが12の動機づけ領域と関連する利益、つまり個人的 (individualistic)、集団的 (collective)、およびそれらの両方への利益と結びついていると述べた。個人主義は、個人間の絆 (ties) が緩やかな社会に適する考え方であり、人々はおそらく自分自身やごく身近な家族に気をつけることを期待される。この個人主義の社会では、「私 (I)」という意識、自立性、感情的独立性、プライバシーの権利、喜びの追求、財の安全、あるいは特定のひととの友好的関係が強調される (Kim, U., et al., 1994)。他方、集団主義は、疑問の余地なく求められる集団への忠誠心と引き替えに、一生を通じてそこに所属する人々を守り続けるという、強く凝集性の高い社会に適する考え方である。この集団主義の社会では、「我々 (we)」という意識、集団的アイデンティティ、感情的依存性、集団の団結、分かち合い、義務 (duty) と責務 (obligation)、あるいは集団の決定が強調される (Kim, U., et al., 1994)。ただし、Schwartz (1994) は、ただ単純に、個人主義と集団主義の二極からなる単一次元で価値の文化比較を考える代わりに、西洋文化圏のみならず東洋文化圏をも含めた多文化圏で保持されている多様な価値を研究する過程で、個人主義／集団主義とは別の次元を想定した、新たな理論的枠組みを提案している。

さて、Schwartz & Bilsky (1990) は、利益を反映する動機づけ領域として、個人的利益に5領域、集団的利益に3領域、そして両方の利益に4領域をあげた。そこでこれらの利益ごとに、動機づけ領域に見られる価値感の変容を検討する。

個人的利益を表すと考えられる動機づけ領域の中で、快楽主義、社会的勢力、および刺激では、調査対象者と調査時期との交互作用が有意であった (表2, 4, 12)。大学生が89年と94年の間で一貫してこれらの価値を重要と見なしているのに対して、89年において教師は大学生とほとんど同じ程度、あるいはわずかながら低い程度でこれらの価値を評価していたが、94年では重要度を低下させている (図3, 5, 7)。また、達成でも、統計的に有意ではなかったが、94年の教師がこの価値の重要度をやや下げている (表3, 図4)。さらに、自己指向性では、教師に加えて大学生までもが、89年よりも94年においてこの価値の重要度を下げている (表5, 図6)。これらの結果から、個人主義的利益を表す価値においては、大学生が比較的安定してこれらの価値を重要視している一方で、教師が最近の5年間にこの価値の重要度を低下させていることが分かる。

経済的に豊かな社会で成長した現代青年の中には、自宅に個室を確保することで親をはじめとする周囲の干渉を避け、プライバシーを守ることが可能にした者も多い。その結果、彼らは自分自身の個人的生活を重視する一方で、次第に家族との絆を重視しなくなり、家庭内の人間関係が希薄化しつつある。その人間関係の様相はあたかもホテル住人のそれであり、このような家族関係を象徴化して「ホテル家族」という言葉が生まれた (小此木, 1992)。したがって現代の大学生が作り出す社会では個人同士の結びつきが緩やかであり、その中で彼らは個人的な

I 個人的（個人主義的）利益

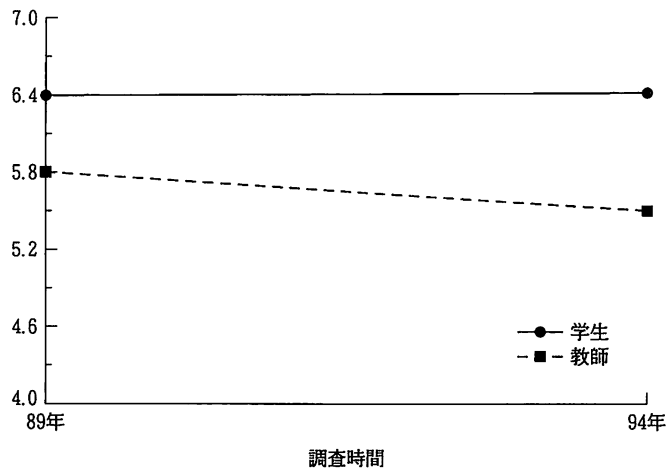


図3 快樂主義の重要度

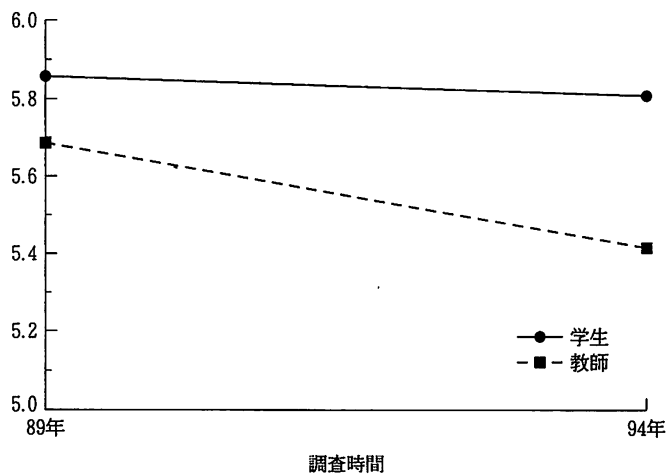


図4 達成の重要度

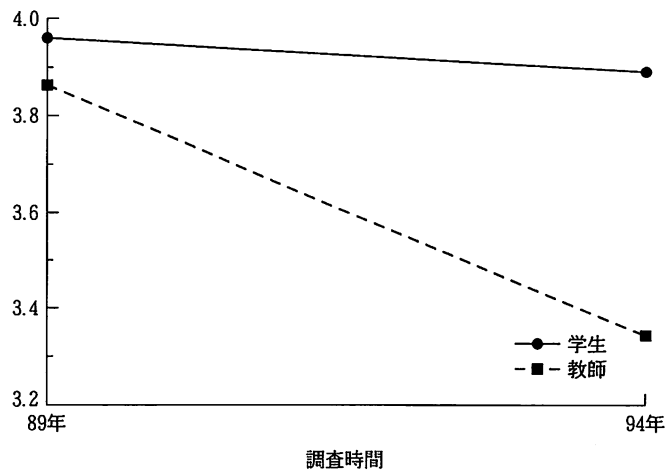


図5 社会的勢力の重要度

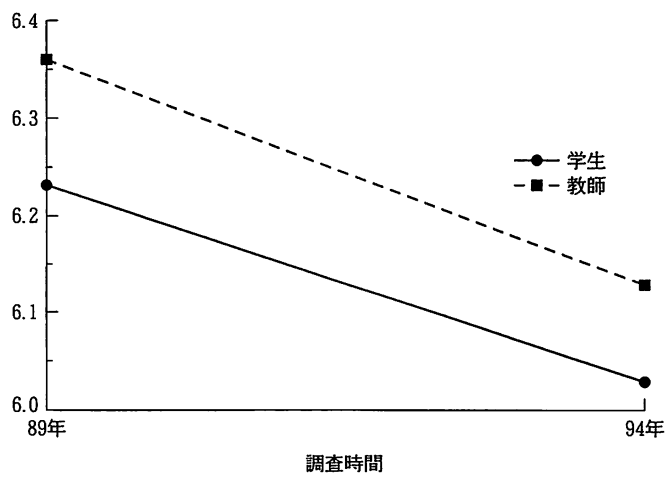


図6 自己指向性の重要度

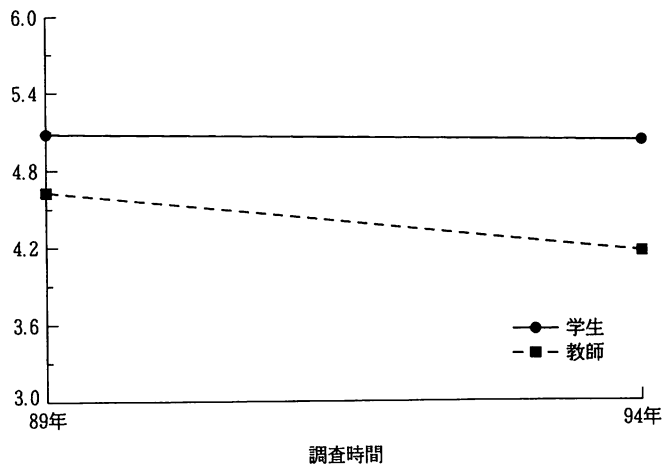


図7 刺激性の重要度

快楽や刺激を追求し、自分のイメージの維持を重視するのだろう。他方、教師は、過去5年間で個人主義的な利益を低めつつある。彼らは、我が国において皮相的な人間関係が生み出す社会的弊害に注目し、個人主義的利益が高まる背後で進行する人間関係の希薄化を否定する志向性を持ちつつあるのではないだろうか。

集团的利益を表す動機づけ領域は、制限的同調性、向社会性、および伝統の維持であるが、これらの結果に関しては、個人的利益で見られたような一貫性はない。制限的同調性は、個人的利益に含まれる動機づけ領域の価値にかなり類似した傾向を示している（表6、図8）。他方、伝統の維持では、個人、集団の両方の利益に含まれる領域の価値とよく似た反応傾向を示して

II 集团的（集団主義的）利益

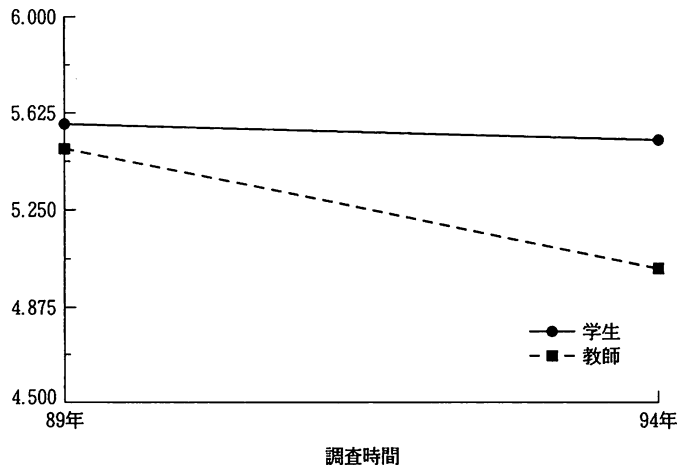


図8 制限的同調性の重要度

いる(表10, 図10)。ただし、いずれの領域においても、教師が抱く価値の重要度が89年よりも94年において大きく低下している。教師は、集団主義的社会の存在を支持する伝統と社会的秩序の維持や、それらを効果的に進めるための自己訓練や従順さに対して、徐々に価値を置かなくなっているのであろうか。これらの結果は、教師の場合、個人主義的社会の価値を重視しなくなることが、けっして集団主義的社会の価値を重視することにはならないことを示している。それはまた、個人的利益と集団的利益とが両立しうる (compatible) ことを示唆する結果でもある。集団的利益と関連づけられる領域の中で、向社会性は他の2つの領域とは異なり、学生が89年よりも94年においてこの価値の重要度をより一層低めているのに対して、教師は89年と94年の両方でこの価値を重要と見なしている(表7, 図9)。教師は一貫して誠実さ、正直さ、

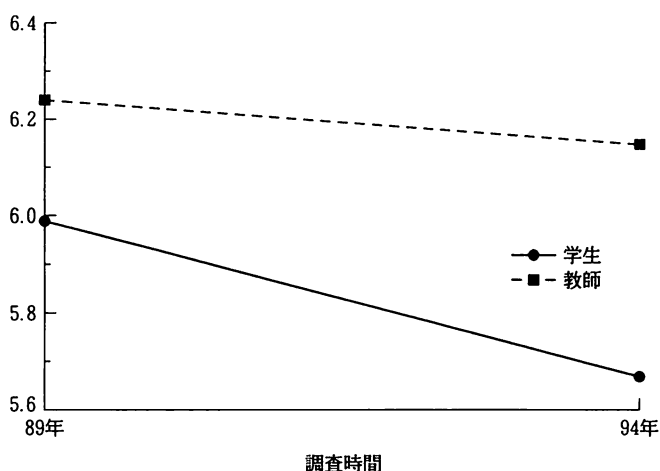


図9 向社会性の重要度

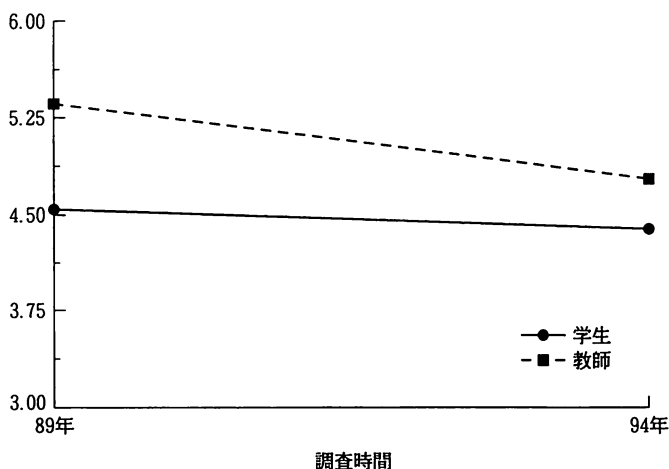


図10 伝統の維持の重要度

寛容さが尊ばれる社会の維持を期待し、互いが利益を持ちあい援助しあう社会の存続を求めている。したがって、彼らは、集団主義的社会を根本的に否定しているわけではなさそうである。

さて、個人、集団の両方の利益を表す動機づけ領域の中で、成熟性、審美性、および精神性は、いずれも調査対象者と調査時期との交互作用が有意であり(表8, 11, 13), また安全でも交互作用は有意でなかったものの(表9), 他の3つの領域と同様の価値優位性の変容が見られた(図11, 12, 13, 14)。すなわち、両方の利益に関連する動機づけ領域では、他の利益に比べれば相対的に重要度は高いものの、学生は教師よりも一貫してこれらの価値の重要度を低く評価していた。これに対して教師は、89年では個人と集団の両方の利益に関連づけられる価値を

Ⅲ 個人的と集団的の両方の利益

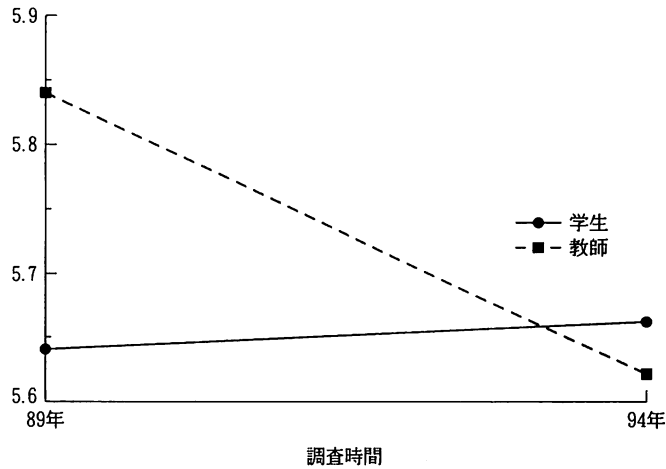


図11 成熟性の重要度

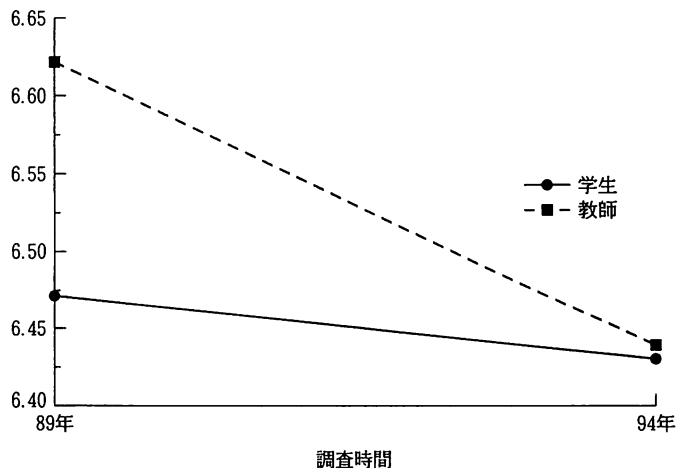


図12 安全性の重要度

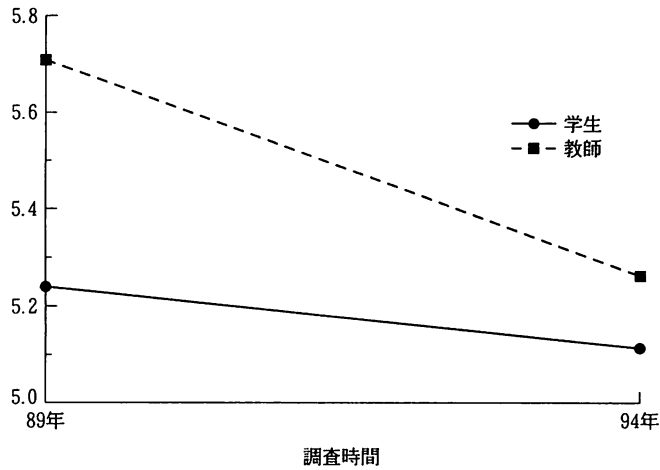


図13 審美性の重要度

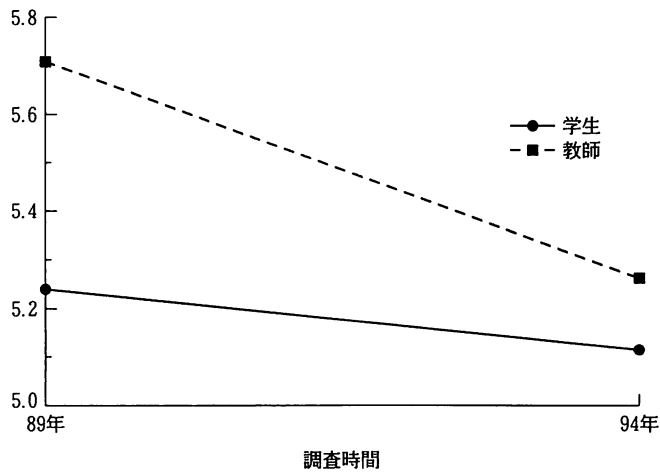


図14 精神性の重要度

かなり重要だと思っていたにもかかわらず、94年では重要度を下げており、大学生と同程度にしかこれらの価値を重視していない。ここにあげられた動機づけ領域は個人と社会の双方に向けられる利益に関連する価値を含んでおり、それらの達成は個人に精神的充実と安寧をもたらすだけでなく、広く社会全体に安定と精神的豊かさを供給すると思われる。またここに含まれる動機づけ領域は、Inglehart (1991) が述べた脱物質主義とも共通した内容を持っている。つまりこれらの動機づけ領域は、自己実現的欲求に代表される、人間のより高次の欲求の充足に不可欠な価値を含んでいる。本研究の結果は、大学生のみならず教師もが最近の5年間でこれらの価値の重要度を低めており、Inglehart (1991) が仮説した物質主義から脱物質主義への

静かな移行とは異なる内容となった。脱物質主義，あるいは精神的価値の実現に逆行する動向は，現代日本社会の特徴となっているのであろうか。あるいは世界的に，脱物質主義への移行が停滞ないしは阻害されているのだろうか。これらのことは価値の総合的な文化比較的研究を通してはじめて解明されると考えられる。

〔引用・参考文献〕

- 秋葉英則 1994 現代青年の価値観と生活意識の変貌 文部省平成4／5年度科学研究費補助金（総合研究A）研究結果報告書。
- 鮎戸 弘・田中寿六 1986 物質志向・脱物質志向—ライフスタイルと社会生活— 青年心理, 58, 438-445.
- 箱井英寿・高木 修・岩脇三良・岩男寿美子 1990 The 10th IACCP congress
- Inglehart, R. 1991 Culture shift in advanced industrial society. 村山皓他訳 1993 カルチャーシフトと政治変動 東洋経済新報社.
- 柏尾眞津子・高木修・西川正之・矢島誠人 1995 価値およびその変容の国際文化比較研究 (3)価値変容とそれを規定する要因 日本心理学会第59回大会発表論文集, 85.
- 柏尾眞津子・高木修・西川正之・矢島誠人 1997 価値およびその変容の国際文化比較研究 (5)価値変容とそれを規定する要因 日本教育心理学会第39回大会発表論文集, 339.
- Kim, U., Triandis, H. C., Kagitcibasi, C., Choi, S.-C., & Yoon, G. (Eds.). 1994 *Individualism and Collectivism: Theory, method, and applications*. London: Sage.
- 西川正之・高木修・矢島誠人・柏尾眞津子 1995 価値およびその変容の国際文化比較研究 (1)研究の経緯と概要 日本心理学会第59回大会発表論文集, 83.
- 見田宗助 1972 現代日本の精神構造 弘文堂.
- 岡林秀樹 1996 大学生の価値志向と教育環境の時代的変遷 教育研究 38, Pp109-155
- 小此木啓吾 1992 家庭のない家族の時代 ちくま文庫.
- Rokeach, M. 1973 *The nature of human values*. New York : Free Press.
- Rokeach, M. 1974 Change and stability in American value systems, 1968-1971. *Public Opinion Quarterly*, 38, 222-238.
- Schwartz, S. H. 1992 Universals in the content and structure of values : Theoretical advances and empirical tests in 20 countries. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental Social Psychology*, Vol.25, 1-65. New York : Academic Press.
- Schwartz, S. H. 1994 Beyond individualism-collectivism : New cultural dimensions of values. In U. Kim, C. Kagitcibasi, H. C. Triandis & G. Yoon (Eds.), *Individualism and collectivism Newbury Park, CA* : Sage. 85-119.
- Schwartz, S. H., & Bilsky, W. 1987 Toward a psychological structure of human values. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 550-562.
- Schwartz, S. H., & Bilsky, W. 1990 Toward a theory of the universal content and structure of values : Extensions and cross-cultural replications. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 878-891.
- 関 峯一・返田 健 1983 大学生の心理 有斐閣.
- 総理府青少年対策本部 1977 第2回世界青年意識調査 総理府.
- 総理府広報室 1992 国民生活に関する世界調査 総理府.
- 総務庁青少年対策本部 1988 第4回青年意識調査 総務庁.
- 総務庁青少年対策本部 1990 青少年の連帯感に関する調査 総務庁.
- 総務庁青少年対策本部 1993 世界青年意識調査 総務庁.
- (社) 全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センター 1993 ボランティア活動年報.
- 高木 修 玉木和歌子 1996 阪神・淡路大震災におけるボランティア—災害ボランティアの活動とその経験の影響— 関西大学社会学部紀要 第28巻 第1号 1-62.
- 高木 修・柏尾眞津子・西川正之 1997 価値及びその変化の比較文化研究 (1)価値の変化認識とそれを規定する要因 関西大学社会学部紀要 第29巻 第2号 77-103.

- 矢島誠人・高木修・西川正之・柏尾眞津子 1995 価値およびその変容の国際文化比較研究 (2)教師と学生の価値構造の差異とその変化 日本心理学会第59回大会発表論文集, 84.
- 矢島誠人・高木修・西川正之・柏尾眞津子 1997 価値およびその変容の国際文化比較研究 (4)評定者と調査時期の違いが価値の優位性に及ぼす影響 日本教育心理学会第39回大会発表論文集, 338.

—— 1998.1.12受稿 ——